

II - 5. ネットワーク推進活動

～学びと参画のプロセスをつくり出そう

ネットワーク推進プロジェクトチーム・リーダー：森 良

■ ネットワーク推進活動の概要

2003年度、ESD-Jは設立準備世話人会の段階も含めて15ヵ所で地域ネットワークミーティングを開催してきた。その目的は、

- ① ESDについての基本的理解をはかり、
- ② 地域での展開の核となる人々に地域展開のデザインを考えてもらうこと

であった。そしてその成果を持ち寄り、地域同士が学びあい、ESD-Jのあり方を共に探るための全国ミーティングを、2004年3月5日に開催した。

現在までのところ、①についてはかなり進めることができたが、②はようやく始まったばかりであると言える。ただし、地域の核となる人々にその課題意識をもってもらえることはできたと思う。

ここでは、北海道から沖縄まで全国15ヵ所で開催された地域ネットワークミーティングの開催状況と概要について報告したい。なおこのミーティングの性格は第一次(1～8)、第二次(9～15)の2つに分かれる。

【第一次】環境事業団地球環境基金の協力で、ESD-J設立世話人会が地域の担い手に呼びかけ、ESDについての理解の共有と地域での活動の開始を促すために開催したもの。(1～6は環境事業団主催、7・8は世話人会と地元団体の共催)

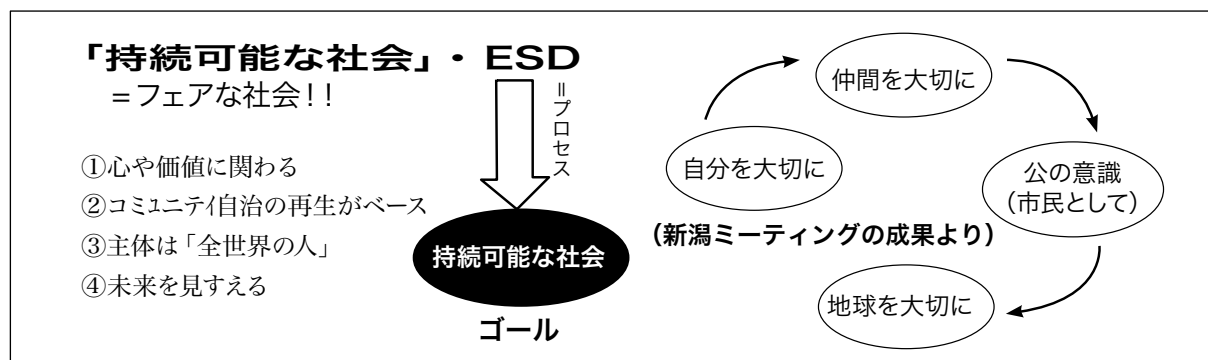
【第二次】03年6月に設立されたESD-Jが公募したもの。

「地域でESDを展開するための担い手(コーディネーター)が集まり、今後の進め方を話し合う地域ミーティングを開催してくれる共催団体を募集します」「あなたがやっていることを知りたい～つながって力がつく、新しい見方ができる～」という文言で呼びかけた。

■ 見えてきたこと

各地の報告は異口同音に「多様な主体がつながりあえた」ことを評価している。これはESDだからできたことである。その中で、「持続可能な社会とは」「ESDとは」という議論が活発に交わされ、ある程度の共通理解が生まれはじめたのではないかと思う。その内容を要約したのが<図1>である。

<図1>



さらに、地域の核になる人々は地域展開の具体策を切実に求めており、そのとっかかりはいくつか見えてきている。

■ ESD 展開の方法

共通理解の中には、ESD の展開の方法に関わることもいくつかある。

- a. 教育的アプローチについての考え方
つながりを伝える / 部分の学びから全体の学びへ / 社会の仕組みを変える行動につなげる
- b. 持続可能な地域づくりに必要なこと
地域デザイン / コミュニティでの課題解決の手法の刷新（行政依存→自治・参画）
- c. 担う主体の形成・強化に必要なこと
言葉・概念（例えば「開発」）の理解 / 市民性の涵養

■ どこから始めるか

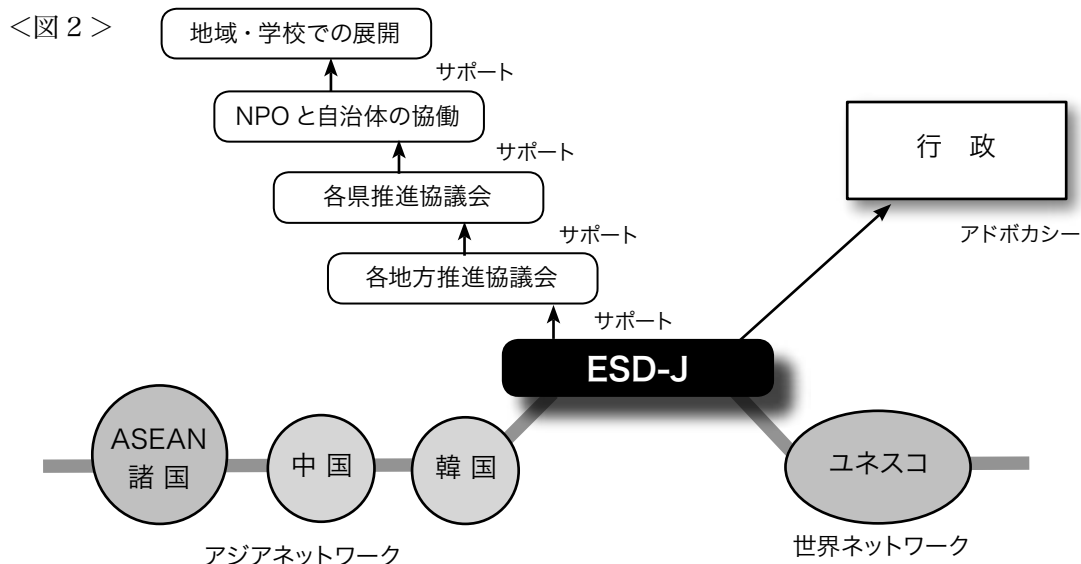
p50 ～ 53 の地域ミーティング開催概要一覧の「なにをやるのか」「課題」「キーワード」の項を見ていただくとわかるように、4つの地域（沖縄、奈良、浜松、札幌）から「こども」というキーワードがあがっている。考えてみれば、子どもは「未来の市民」あるいは「小さな市民」である。子どもの居場所づくり、子どもの参画の場づくりは持続可能な地域づくりあるいはそのための教育の重要な柱となる。

もう一つのとっかかりは、広島での「平和のとらえ直し」奈良での「部落解放運動や人権教育の革新」に見られるように、既存の運動・活動や教育のとらえ直し・再定義・再構築である。これはまさに「多様な主体がつながる」ことによって可能となる。

この1年間の ESD についてのコミュニケーションの成果の概要は以上である。

教育とは学びと社会参加のプロセスである。多様なテーマ・主体がつながり学びと参画のプロセスをつくり出そう。

わたしたちが考える地域展開のサポート体制のイメージは＜図2＞のようである。04年中には基本的なサポートのしくみを確立し、地域でのひろがりを推進していきたい。



■ その他協力事業

ESD-J では、ESD-J 自らが共催を働きかけて実施した上記の地域ミーティングに加え、各地で独自に開催される ESD 関連事業に対し、共催、後援、講師派遣など、様々な形で参加・協力し、ネットワークの形成に努めてきた。2004 年度以降も継続して行っていきたい。

	事業名	開催日	主催団体
共催	第 10 回おかやま国際貢献 NGO サミット	1 月 22 ～ 25 日	国際貢献トピア岡山構想を推進する会 ・岡山ユネスコ協会
後援	2003 年度中四国ブロック・開発教育人材育成セミナー	2 月 21 ～ 22 日	2003 年度中四国ブロック・開発教育人材育成セミナー実行委員会
協力	持続可能な開発のための教育 ファシリテータートレーニング	8 月 16 ～ 17 日 8 月 23 ～ 24 日	さっぽろ自由学校「遊」
協力	熊野・開発教育人材育成セミナー「持続可能な林業から学ぶ」	1 月 24 ～ 25 日	「関西ブロック開発教育人材育成セミナー」実行委員会
講師派遣	東北環境教育ミーティング 2003	10 月 18 ～ 19 日	東北環境教育ネットワーク
講師派遣	霞ヶ浦研究会環境教育講座	12 月 6 日	霞ヶ浦研究会
講師派遣	環境教育ネットワーク千刈ミーティング 2004	1 月 10 ～ 12 日	環境教育ネットワーク千刈ミーティング実行委員会
講師派遣	第 2 回田貫湖ミーティング	2 月 7 ～ 8 日	NPO 法人富士山自然体験活動推進協議会
講師派遣	北海道環境教育ミーティング	2 月 27 ～ 29 日	北海道環境教育ミーティング 2004 実行委員会
講師派遣	64 回いたばしボランティア・市民活動フォーラム	3 月 19 日	大原社会教育会館

1 ESD 地域ミーティングレポート

開催概要一覧 (2003 年3月～2004 年2月)

NO.	地域	日時	主催／共催団体	参加者	
1	仙台	03.3.7 (金) 17:30 ～ 20:30	環境事業団／NPO 法人環境保全米ネットワーク	45 名 (宮城、青森、山形、岩手) (環境、女性、国際理解など)	
2	岡山	03.3.15 (土) 13:00 ～ 17:00	環境事業団／岡山 NPO センター、岡山ユネスコ協会、日本ユニセフ協会岡山県支部 他	38 名 (環境、平和、人権、ジェンダー、国際理解、開発教育など)	
3	札幌	03.3.17 (日) 17:30 ～ 21:00	環境事業団／NPO 法人当別エコロジカルコミュニティ、(財)北海道環境財団	28 名 (環境教育、開発教育、学生、YMCA、国際交流協会など)	
4	九州	03.3.22 (土) 13:30 ～ 16:30	環境事業団／(財)北九州国際技術協力協会、(財)アジア女性交流研究フォーラム、北九州市立環境ミュージアム	39 名 (環境、人権、ジェンダー、開発、医療、ボランティア、国際、教育など)	
5	東京	03.3.30 (日) 13:30 ～ 17:00	環境事業団／(社)日本環境教育フォーラム、ESD-J 設立準備世話人会	39 名 (子ども、環境、開発、ボランティア、開発教育、まちづくりなど)	
6	中部	03.4.12 (土) 13:45 ～ 17:00	環境事業団／NPO 法人中部リサイクル運動市民の会、エコプラットフォーム東海 他	61 名 (東海3県、静岡) (環境、開発、ジェンダー、人権、平和、国際などの NGO、企業、教育など)	
7	浜松	03.6.7 (土) 19:00 ～ 21:00	NPO 法人サンクチュアリエヌピーオー、NPO 法人ドリームフィールド	38 名 (NGO、教育関係者、個人)	

	成果		課題	キーワード
	ESD とは	なにをやるのか		
		NPO 同士の連携、行政や学校への働きかけ、ネットワークづくり、コーディネートできる人材育成	東北各地でミーティングを開く	体験、感じる、多様な働き方、食、学校、自給、伝統、風土にあった暮らし方、循環、格差、政策決定への関心
	「直せないものを壊さない、壊せないものをつくらない、食べ続けられる社会」「多様な個性が輝く、スローイズビューティフルな社会」	話し合いを継続し、具体的な行動や提案を出す。04 年 1 月の ESD をテーマとした「おかやま国際貢献 NGO サミット」の開催。		
	①持続可能な社会の主体は「全世界の人」 ②心に関わる ③フェアな社会 ④未来を見すえる	「つながりを伝える」ための多様な機会を提供する 1割～2割の問題意識を持っている人をターゲットに	・具体策（地域や政策など）をもっと話し合いたい ・プロセスに多くの人が加わる中からネットワークがパワーとなるようなコーディネートを行う。	子ども、社会(地域)、個の尊重、フェアな社会、つながりを伝える
	・地域に対応した豊かさを追求する教育 ・日本と途上国とでは内容が違う ・国際社会とのつながりを考えて地域の中で大人と子どもが共に学びつながりを持つ	・キャンペーンに関する情報供給 ・レベルごとのフォローアップ集会の開催		
	・テーマに対する市民の主体的解釈 ・大人の学びと子どもの学びをつなげる ・問題解決でつながる	・情報の共有の仕組みをつくる ・重点課題をみつける ・優先順位をつける ・学校を巻き込む		・市民主導 ・当事者性 ・プロセス ・共通認識をつくる
	・私の活動がいかに ESD につながっているのか	・ゆるやかなネットワークをつくり情報交換をしていく		
	「開発」についての疑問	意見交換の継続	・「なかよしネットワーク」→もちつもたれつの関係へ ・コミュニケーションをとれない子どもにどのように対処するか	

II - 5. ネットワーク推進活動

NO.	地域	日時	主催／共催団体	参加者	
8	愛媛	03.6.16 (日) 14:00 ~ 17:00	えひめグローバルネットワーク	58 名 (NGO、事業者、農業者、行政、 大学、学校、学生、市議など)	
9	岐阜	03.11.16 (日) 10:00 ~ 15:30	NPO 法人地球の未来、エコプラ ットフォーム東海	33 名 (NGO、大学、行政など)	
10	広島	04.1.17 (土) 13:00 ~ 16:50	ESD-J 広島	28 名 (NGO、教師、市民、教委、 企業、行政、宗教、弁護士など)	
11	沖縄	04.1.17 (土) 17:00 ~ 18 (日) 9:30	NPO 法人エコ・ビジョン沖縄	24 名 (環境団体、国際協力団体、 個人)	
12	新潟	04.1.31 (土) 13:00 ~ 2.1 (日) 16:30	ESD「地域ネットワークミーティン グ」にいがた 他	61 名 (まちづくり、環境教育、福祉、 教育関係など多様)	
13	関西	04.2.3 (火) 14:00 ~ 17:00	NPO 法人関西 NGO 協議会	39 名 (NGO、大学教員)	
14	富山	04.2.8 (日) 13:00 ~ 17:00	NPO 法人エコテクノロジー研究 会	33 名 (NGO、教育関係者、行政、 学生、一般)	
15	奈良	04.2.11 (水) 14:00 ~ 17:00	NPO 法人ほっとねっと	11 名 (NGO、部落解放同盟など)	

	成果		課題	キーワード
	ESD とは	なにをやるのか		
	少し共有できた。理念よりも持続社会のイメージとそれを推進するしくみを具体化したい。	フォローアップ会議や学習会	短期的なメリットのためにつながり、長期的にはESDの推進に結びつく形のネットワークが必要。	総合学習、第一次産業、地産地消、青年、参加、四国、NGO、ネットワーク、人材育成
	持続可能な社会について共有するワーク			地域デザイン
	社会の仕組みを変える行動につなげる、多様なものの考え方、自尊感情、関わり方、自立、対話、ネットワーク推進	<ul style="list-style-type: none"> 各活動が広く面としてつながりあえる場を多く設ける 平和を考えるためのテキストの用意 	「平和」や「教育」を柱にゆるやかにつながる。「平和」のアクティブなとらえ直し。	相互理解、自尊感情、次世代がさらに次の世代へ、ネットワーク、多様性
	少し共有できた。	第2回地域ミーティング(04夏)。 テーマ：子どもの参加	言葉のイメージが異なる(「持続可能」「開発」「教育」など)のを各自の実践の中でどうつなげていくか	
	<ul style="list-style-type: none"> 部分の学びから全体の学びへとシフトすることにより自分の喜びのために学ぶ 個の確立と地域性・世界性の探求 	①同様のミーティングを県内の地域に出前に開催する ②研修合宿で人材育成 ③教育・行政をまきこんだ編集チーム	自分たちの気づきを地域に広げていくときに意識する壁をのりこえるために仕掛けていく	共通の課題、自分を大切に→なかまを大切に→公の意識→地域を大切に
	持続可能な社会を構築するには教育的アプローチが必要。	<ul style="list-style-type: none"> ESD・関西設立(4/22) 国際理解教育学会シンポ(6/5) 	<ul style="list-style-type: none"> さまざまな教育分野で活動してきた人たちが理念や実践をぶつけ合いわかちあう。 基本的な用語の理解 	アンテナ、教育的アプローチ
			参加者の中からコアメンバーを募り、ネットワークをつくり、富山におけるESDの実践に向けた長期的な戦略を練る	
	<ul style="list-style-type: none"> 課題を見つけ共有すること コミュニティ自治の再生 	子どもの居場所づくり(奈良まるごと博物館づくり)	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティでの課題解決の手法の刷新(行政依存型→自治型・参加型) 課題のひろがり(人権+プレイパークなど) 	子どもの参画、部落解放運動や人権教育の革新

仙台

開催日：平成 15 年 3 月 7 日（金）17:30 ～ 20:30

場 所：ハーネル仙台（宮城県仙台市青葉区上杉 1-16-3-5F）

「持続可能な開発のための教育」 ネットワーク・ミーティング

主 催：環境事業団地球環境基金

協 力：NPO 法人 環境保全米ネットワーク、ESD-J 設立準備世話人会

事務局：NPO 法人 環境保全米ネットワーク

連絡先）住所 仙台市青葉区上杉 1-16-3-5F

TEL 022-261-7348 FAX 022-261-7488

HP <http://www.epfnetwork.org/okome/>

担当者）西館・枝松 e-mail okome@epfnetwork.org

参加者：参加者数 45 名

宮城県、青森県、岩手県、山形県と東北 6 県のうち 4 県から参加があり、また、行政、NPO、研究者、学生など様々な層からの参加が得られました。分野としては環境団体が多く、ほかに女性や国際理解などの団体からの参加でした。環境団体も、自然の中で子どもをターゲットにする団体から、暮らしを支える農業や地域づくりに関わろうとする団体など幅広い分野活動にわたるものでした。

スケジュール	17:30	開会の挨拶	環境事業団・地球環境基金 樋口正昇部長 宮城教育大学 小金澤孝昭教授
	17:40	「持続可能な開発のための教育 10 年」について	ESDJ- 設立世話人 廣野良吉名誉教授
	18:00	東北地域での活動について	
		・みやぎ環境とくらしネットワーク（MELON）事務局・南隆昭（仙台）
		・川と森のクラブ代表・内田尚宏（岩手）
		・女性 SOHO グループ キャリ・マミーズ代表・藤沢基子（山形）
		・くりこま高原自然学校代表・佐々木豊志（宮城・栗駒）
		・サイカチネーチャークラブ代表・小野正之（仙台）
		・仙台いぐね研究会小田隆史（仙台）
		・ヨハネスブルグ・サミットに参加した若者	... 宿野部葵／加藤香子（仙台）
		・環境保全米ネットワーク 事務局長・小金澤孝昭（仙台）
		・リサイクル野菜ネットワーク事務局・徳田実（仙台）
		・仙台市環境局 課長・村山卓（仙台）
	18:55	休憩	
	19:10	意見交換	コーディネーター：村上千里
	20:20	閉会の挨拶	ESDJ- 設立世話人 廣野良吉名誉教授 宮城教育大学 小金澤孝昭教授

■内容紹介

廣野先生より、ヨハネスブルグサミットから「持続可能な開発のための教育」が国連で提唱されるまでの経緯や、過去に国際的に取り決められたことが日本で地域でどのようなことにつながったかを女性、男女参画を例に話がありました。

続いて東北各地の活動のリレー発表があり、経緯や現在の活動状況、さらに今後の抱負等を語っていただきました。体験、感じる、多様な働き方、食、学校、自給、伝統、風土にあった暮らし方、循環、途上国と先進国の格差、政策決定への関心など、多くのキーワードが出され、またそれにどのように取り組んでいるか、学校や異分野の団体とどのように連携していったか、など具体的な進め方に関するヒントも、たくさん学ぶことができました。



ミニワークショップでは、まず所属や地域別に集まりながら、どのような来場者かを把握することで体と場の緊張をほぐしたところで、9つのグループにわかれて持続可能な社会にイメージを出し合い、そのような社会を作るために今の活動が貢献できることを考え、そのような活動がもっと広がっていくためには何が必要か、についてディスカッションをしました。

さまざまなイメージがだされましたが、必要なものとして、問題に気づいた人が具体的に行動すること、さらに身近な人・地域の人を自分たちの活動につれてきたり、NPO 同士の連携や行政・学校への働きかけなど人のつながりが重要で、そのためにもネットワークの形成や情報の発信・交換、コーディネートできる人材育成、活動のための費用などがあげられました。

最後に参加者から「持続可能な社会を作ろうというのはわかるが、持続可能な”開発”が何を指しているのかわからない。”社会の創造”の方がいいのではないか」という意見が出され、廣野先生が「日本では”開発”という言葉に結びつくイメージが悪すぎる。ここでいう開発はまさに”社会を創造すること”と捉えて、その地域地域でわかりやすい言葉を搜し、使っていったほしい」と話されました。”開発”という言葉を利用して理解し、普及することの困難さをあらためて感じさせられた応答でした。

閉会後も参加者同士の話しは続き、「さまざまな意見に出会えて有意義」「ワークショップをとおして ESD ちょっと見えてきたかも」「自分のできることを広げていきたい」「これからの 10 年の動きをつくらねば」「もっと回数を開いて」との感想がありました。

■今後に向けて

事務局団体の小金澤先生より、「東京からの呼びかけで東北で意見交換する場が提供できればと考えた。今後も、このような広く集まり意見交換できる場が東北の各地でできればと考えている」との閉会の挨拶があった一言につきるでしょう。今回の地域ミーティングについてあちこちの団体に呼びかけたときに、参加できないのでメールで応援いただいたり、資料を後で欲しいという声があったり、関心は決して低いものではありませんでした。この関心の高さを一過性にするのではなく、今回をきっかけに様々な情報の交流、さらには活動の連携ができれば、と考えます。今回の幅広いセクターや団体が各々関わっている機関や地域へ情報発信、特に教育機関への情報発信することなどが考えられます。

そのためには、今回わかりにくいと指摘のあった「持続可能な開発」という言葉をまず自分たちで租借するとともに、自分たちの活動と「持続可能な開発のための教育」とのつながりをみつけていくことも始めたいと考えています。

報告：枝松芳枝

岡山

開催日：平成 15 年 3 月 15 日(土) 13:00 ~ 17:00

場 所：岡山国際交流センター 国際会議場

「持続可能な開発のための教育」ネットワーク・ミーティング

主 催：環境事業団地球環境基金

協 力：NPO 法人 岡山 NPO センター、岡山ユネスコ協会

国際貢献トピア岡山構想を推進する会、財団法人日本ユニセフ協会岡山県支部、
ESD-J 設立準備世話人会ほか

事務局：岡山ユネスコ協会 連絡先) 住所 〒700-0026 岡山市奉還町 3-1-28

TEL 086-255-0651 FAX 086-255-0651

HP <http://www.unesco.or.jp/okayama/>

担当者) 池田満之 e-mail o-unesco@ddn.ne.jp

参加者：参加者数 38 名

主な参加者の所属団体：環境事業団、ESD-J 設立準備世話人会、ESD-J 設立準備事務局、グリフィス大学、法政大学、岡山ユネスコ協会、国際貢献トピア岡山構想を推進する会、ユニセフ協会岡山県支部、世界女性会議岡山連絡会、岡山 NPO センター、岡山県人権・同和教育研究協議会、倉敷アムネスティ、岡山市立足守中学校、エコウェーブおかやま、サントイス、岡山県技術士会、岡山大学環境サークル、こどもとともに交流会、国際こどもフォーラム岡山、労働者協同組合センター事業団、国土交通省（広島）、徳島で国際協力を考える会ほか

スケジュール 13:00 開会（司会進行役：岡山ユネスコ協会 池田満之）

開会の挨拶：環境事業団地球環境基金部長 樋口正昇

岡山ユネスコ協会会長 三宅正勝

13:20 自己紹介（一人 30 秒で全員、「名前と所属、参加の動機、関心領域」）

14:00 話題提供と質疑応答

「地方分権時代の自治体の国際交流・国際協力 - アジア・世界の広がり -」

（講師：前世界ユネスコ協会連盟会長・法政大学教授 鈴木佑司）

15:00 「持続可能な開発のための教育」と「持続可能な開発のための教育の 10 年」についての説明と意見交換

（説明：ESD-J 設立準備世話人 江口雄次郎、村上千里、大島順子）

15:30 アイディア交換：「持続可能な開発（＝社会を創る）のための教育」の前提となる

「持続可能な社会」のイメージを参加者全員で共有（コーディネーター：大島順子）

16:40 今後の「教育の 10 年」の進め方に関するアイディア交換

16:50 2003 年度の岡山における活動と ESD-J との連携に繋がる情報提供（池田満之、村上千里）

16:55 閉会の挨拶：江口雄次郎

17:00 閉会

■内容紹介

環境、平和、人権、ジェンダー、国際理解、開発教育といった幅広い領域の第一線で活動している人達が集まったことで、「持続可能な開発のための教育」を多面的かつ横断的に論じ合うことができた。また、はじめの自己紹介においても、「持続可能な開発に疑問を持っている」とか、「サステナブルなどありえないと考えているので、持続可能な社会とは何か知りたくて参加した」などと、懐疑的な見方をしている参加者もいたことで、議論が上滑りにならず、深みのある話し合いができた。

前世界ユネスコ協会連盟の会長で法政大学教授の鈴木佑司さんは、「人間が動かしている以上、人と人、組織の問題が重要である。官と民と言うが、民が官を作るという逆転現象が国内外を問わず起こっていることを話したい」と、個々の人間がどうやって社会を変えていけばいいかのヒントとして、分権化時代の地方自治体の役割、地域の役割、NGO の役割を考える話題提供が行われた。鈴木さんは、「国連が 40 年間、ありとあらゆる開発と援助を行った結果、南北格差は拡大しているが、そんな中で比較的うまくいったのが東アジア・太平洋地域である。アジアは国より地域社会が富を作ってきた。



では地域と地域を結ぶ場合、どうしたらいいかという、どこの国も、優秀で、提携の仕方をきちんと提言できる NGO があるので、その力を借りなくては意味のある国際協力はできない。政府が国際協力をし、官が民に恵んでいた時代から、民が官を教えなくてはいけない時代になっている。現在の日本は市民セクターが伝統的 NPO と新しい NPO によって拡大しているところ。10 年後には市民が行政や企業と対等に事業展開する時代が必ず来る。これからは、現場からの知識で政策形成をする必要がある。自分の力で何とかしていく、人が政府を作っていく、ということが持続可能性につながる」などと話された。

ESD-J 設立準備世話人の江口雄次郎さんと事務局の村上千里さんは、「国連女性の 10 年」などを例に挙げ、「持続可能な開発のための教育の 10 年」でも多くの NGO の協力による運動の展開ができるように、NGO の全国ネットワークを作っていきたいと話された。

その後の意見交換では、「持続可能な開発」の「開発」は、「展開」と訳すか原語 (development) のままの方が、この言葉が持つ多義性が伝わりやすいのではないかと、「社会創造」と考えてはどうかといった意見が出された。また、「持続可能な社会」を創るのが「持続可能な開発」と考え、その前提となる「持続可能な社会」のイメージを参加者全員で出し合った。ここでは、「直せないものを壊さない社会、壊せないものを作らない社会、食べ続けられる社会」、「多様な個性が輝く、スロー・イズ・ビューティフルな社会」、「安心して喜んで子供を生み育てられる社会」、「オンリー・ワンが繋がっていける社会」、「心の中に平和の砦を築いている社会」、「自分が自然の一部であることを実感できる暮らしができる社会」、「いつまでも夢を持ち続けられる社会」などと、様々なイメージが出された。また、「持続可能な開発のための教育の 10 年」のためにしたいこととして、「今の子供達が 2014 年には知らず知らずのうちに持続可能な社会のために活動している人になるように育てていきたい」などといった意見が出された。

最後に出してもらったアンケートには、「これからはプロセスが大事。ぜひネットワークを作り、子供を巻き込み、行動をしていきたい。いきましょう。」といった呼びかけから、「明確な目標がないとわかりにくいし、成果のあるなしも評価できないのではないのでしょうか。」といった投げかけなどが出された。アンケートの中に「次はいつですか」という質問が出されるなど、全体としては「持続可能な開発のための教育の 10 年」に向けての、岡山での確かな第一歩になったものと感じている。

■今後に向けて

今回のような話し合いを今後も深めていき、岡山から「持続可能な開発のための教育の 10 年」に向けての具体的な提案や行動を出していきたい。今後も全国の NGO などとうまく連携していければと願っている。

報告：岡山ユネスコ協会 池田満之

札幌

開催日：2003年3月17日(月) 17:30～21:00

場 所：環境サポートセンター（札幌市北区北7西5 札幌千代田ビル1階）

「持続可能な開発のための教育」ネットワーク・ミーティング

主 催：環境事業団地球環境基金

協 力：NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー、ESD-J 設立準備世話人会

共 催：財団法人北海道環境財団

事務局：NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー

連絡先) 住所〒061-0224 石狩郡当別町末広380 辻野グループビル内

TEL：01332-2-4305 FAX：01332-3-3591

HP：http://www9.plala.or.jp/tectec/

担当者) 山本幹彦 e-mail：tectec@sea.plala.or.jp

参加者：参加者数28名

北海道環境財団/環境サポートセンター、さっぽろ自由学校「遊」、NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー、D-Net、エコネットかわさん、恵庭ホテルの会、事務所うてきあに、NPO 法人 北海道グリーンファンド、循環（くるくる）ネットワーク北海道、北海道教育大学学生、北海道 IYEO、YMCA、北星学園大学経済学部専任講師、社・北海道開発技術センター企画部、ひまわりの種の会、社・滝川国際交流協会、編集工房 NODE、国際協力事業団

スケジュール

- 1) はじめに
- 2) 挨拶 環境事業団地球環境基金（田中稔）
- 3) スタッフ紹介
- 4) 「持続可能な開発のための教育の10年」の経緯と報告
ESD-J 設立準備世話人会（水野憲一）
- 5) ワークショップⅠ「自己紹介」
……「今、行っている活動」と「達成したい抱負」を一言で
- 6) ワークショップⅡ「自分の考える持続可能な社会とは何か？」
……（〇〇が××な社会）」
- 7) ワークショップⅢ「持続可能な社会を作っていくための教育とは」

■内容紹介

●ワークショップⅡ「自分の考える持続可能な社会とは何か？（〇〇が××な社会）」

「持続可能な社会」についてのイメージを共有するためにアイデアを出し合った。個人でいくつかのイメージしたものを書き、4人組になってシェアした。

皆が出した意見はおおむね未来志向である。

例えば「すさんだ心」のように、過去から何が持続していないのか。これをどう回復するか。いいものは過去・現在・未来に持続している社会でなければならない。

公平という意見が各グループから出た。不均衡を是正することが必要条件といった感じだった。

また、主体は誰か（誰のためのものか）という話があったが、「みんな」ということばが、「全ての東京の人」、「全ての日本人」など狭い感覚で動いていないか？「南北間格差」など現在の差を認識した上で、公平・公正を達成しなければならない。その上で、搾取しないということに共感した。特に未来に対して搾取しているのでは考えた。時系列の思考でも搾取が言える。
☆具体策をもっと話し合いたい。地域や政策など。（各グループでまとめた内容は以下の通り）

①「全世界の人」が持続可能な社会の主体である！

②心に関わる言葉が多かった。

頑張る ⇒ 自己実現のために頑張ることと、強制的に頑張ることがある。

経済成長をがんばりの元にしたから、全体を見据えた充足した社会

③キーワードは、「こども」、「社会（地域）」、「個の尊重」

④まとめるとフェアな社会！！

⑤今の社会はこの持続可能な社会ではない。未来を見据えていかなければならないのでは？

●ワークショップⅢ「持続可能な社会を作っていくための教育とは」

持続可能な社会のイメージを共有した上で、それを実現するための教育についてアイデアを出し合った。そのポイントを紹介すると、

新たなカテゴリーができるのではなく、つながりを伝えることではないか、そのための多様な教育の機会を提供する必要がある

問題意識を持っているのはどの世代の人にも1割から2割いるだろう。その他の人は誰かが動いていれば動くだろう。つまり、1割から2割の人をターゲットにしていこう。

■感想・今後の展開

道内では今までに内ジャンルの人たちの集まりとなり、参加者それぞれに新鮮だったようだ。ミーティングの後、参加者を中心にメーリングリストを作り、具体的な行動やアイデアについての話し合いを続けてゆくと同時に多くの人たちを巻き込みながら、できるだけプロセスに多くに人が加わる中からネットワークがパワーとなるようなコーディネートを行っていくつもりになっている。

報告：NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー 山本幹彦



九州

開催日：2003年3月22日(土) 13:30～16:30

場 所：北九州市立国際村交流センター国際会議室(北九州市平野八幡東区 1-1-1)

「持続可能な開発のための教育」ネットワーク・ミーティング

主 催：環境事業団地球環境基金

協 力：「(財)北九州国際技術協力協会、(財)アジア女性研究・交流フォーラム、
北九州市立環境ミュージアム、ESD-J 設立準備世話人会

事務局：(財)北九州国際技術協力協会(KITA)

連絡先)住所 北九州市八幡東区平野 1-1-1 国際村交流センター 2 階

TEL 093-662-7770 FAX 093-662-7782

HP: <http://www.kita.or.jp>

参加者：参加者数 39 名

環境系 25 名、人権・ジェンダー系 3 名、開発系 2 名、医療系 1 名
ボランティア系 3 名、国際交流・国際理解 2 名、教育・青年教育 3 名

スケジュール

開会

主催者あいさつ 環境事業団地球環境基金部企画振興課長 田中 稔

趣旨説明 ESD-J 設立準備世話人会 廣野 良吉(成蹊大学名誉教授)

ESD-J の紹介 ESD-J 設立準備世話人会 関口 悦子(GENKI 理事)

意見交換会 ESD-J 設立準備世話人会 村上 千里

(自己紹介、意見交換会、グループディスカッション、プレゼンテーション、全体討議)

総括 廣野 良吉

閉会 KITA 環境協力センター副所長 寺田 圭吾

■内容紹介

●趣旨説明：廣野良吉

「持続可能な開発のための教育 10 年」の世界的背景と NGO、地域の取り組みの必要性について説明

●持続可能な開発のための教育 10 年推進会議について：関口悦子

第 1 回世界女性会議からみる NGO の力と「持続可能な開発のための教育 10 年」に向けての可能性について講演

●意見交換会：村上千里

1 自己紹介、グループ分け(分野が入り混じるように)

2 「持続可能な社会」のイメージについてのブレインストーミング

「持続可能な社会」のイメージを 1 人につき 3 つ書き出した。

グループの中で意見を交換してまとめた。

全員の意見を KJ 法である程度仕分けした。

区分は「生態的」「社会的に構成な視点」「地域で実現したい社会と世界で実現したい社会」

(主な意見)

自然がいつまでも続く社会、自然と人間が共生できる社会、虫が住める社会、食べ物が自給できる社会 など
資源が循環する社会、エネルギーを少なく使う質素節約の社会、物を大事にする社会、子どもと年長者が住みやすい社会、安心して暮らせる社会 など

戦争のない社会、南北が入替わる社会、歴史と文化を大切に
 する社会、人口が増えすぎない社会、地球全ての
 人権が尊重される社会 など

3 グループディスカッション

テーマ「持続可能な社会を実現するための教育とはどうあるべきか」
 先のグループ分けで出来た 6 つのグループでディスカッ
 ションした。

4 プレゼンテーション

第 1 グループ 何が必要か、どのようにすればよいか。

……体験をまなぶ・環境教育の指導価値向上・地域と学校
 の交流・お金の大切さ・きちんと評価できる人の存在

第 2 グループ 持続可能な環境をどのように教育にしていけるか。

……地球規模で考える・南北の貧困問題・森林伐採と日本の関係・無駄のない資源利用と循環・体験教育が大切

第 3 グループ 学校教育・社会教育・(現地における) 国際教育について

……日本の問題点として地域社会、家庭の問題、地域社会の文化の伝承等・途上国は親子の情愛が深い・若
 い者に対する課題のようでプレッシャー

第 4 グループ

① 日本において命の大切さを伝える教育……自然体験・親子関係から命の起源・歴史に学ぶ

② 地域に応じた豊かさを追求する教育

……ジェンダー、識字平等・日本や先進国の押し付けではなく、その人たちが望む社会をつくる

第 5 グループ 日本の出来ることと途上国で出来ることは違うのではないか

……日本で出来ることは、資源が有限であるということを知り、将来リーダーになるような
 人物を育成する・子どもが家庭に持ち帰り家庭教育にも・途上国で出来ることは、途上国で教育を持続で
 きるような支援(人的、金銭的)

第 6 グループ 子どもも大人もない年齢を超えたものである。

……ものを大切にする心を育てる・情報+体験で問題解決能力を育てる・地域の中で大人と子どもが共に学び
 つながりを持つ・国際社会とのつながりを考えて自分たちの足元で地域活動をする・30 代～ 50 代に対し
 ては企業教育の必要性も

●総括：廣野良吉

今日の議論の中での共通な課題は「持続可能な社会」の建設であり、「主体性」、「連帯性」、「地域性」、「お金」の
 4 つを考えた教育が必要であると考えられる。いろいろな国、地域には多様性があり全てを網羅する教育は無理。地
 域においては、自分達の地域における活動と世界のつながりを大切にするような地域教育が出来ればよいと思われる。
 6 月に設立総会を行う予定なので皆様にも是非参加していただきたい。その間、今回の集いをもとに各団体が議論、
 連携し、さらに深めていただきたい。

■今後に向けて

「持続可能な開発(のための教育)とは何かを知りたかった」ということを参加の動機に挙げている団体は多かった。
 参加団体の規模、活動内容等が多様であったため、刺激もあり「持続可能開発のための教育」というキーワードについ
 てある程度の共有認識は持てたものと思われる。しかし、一方で「入口付近で終わった感が強く残念」、「もっと議論
 を深めたかった」等の意見もあり、次のステップを期待する声もあった。

2005 年に向け、「持続可能な開発のための教育 10 年」定着を図るには、キャンペーンに関する情報供給を継続し
 て行くと共に、地域においてもレベルごとのフォローアップ集会などの開催が必要と考えられる。

報告：(財)北九州国際技術協力協会 末吉大祐



東京

開催日 : 2003 年 3 月 30 日 (日) 13:30~17:00

場 所 : 新宿区立 大久保中学校 図書室 (新宿区新宿六丁目 22-15)

ツナガルイミヲカンガエヨウ 「持続可能な開発のための教育の 10 年」ネットワークミーティング

主 催 : 環境事業団地球環境基金

協 力 : ESD-J 設立準備世話人会、(社) 日本環境教育フォーラム、開発教育協会 (DEAR)

NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター、NPO 法人 国際協力 NGO センター (JANIC)

東京ボランティア・市民活動センター、新宿環境情報ネットワーク

事務局 : (社) 日本環境教育フォーラム

連絡先) 新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿 4F

TEL:03-3350-6770

FAX:03-3350-7818

参加者 : 参加者数 53 名

スケジュール

- 1) ごあいさつ 樋口正昇 (環境事業団地球環境基金部長)
- 2) 「持続可能な開発のための教育の 10 年」とは
阿部治 (「ESD-J 設立準備世話人会」)
- 3) 話題提供 : 「国連・婦人の 10 年」と女性運動がもたらした社会の変化
山口みつ子 (財) 市川房枝記念会 常務理事・国際婦人年連絡会事務局長)
地域の人材と学校をつなぎ、大人と子どもが共に学ぶ仕組み作り
加藤 勉 (ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし)
- 4) ミニ・ワークショップ :
 - 1 「持続可能な開発 (のための教育) とは何か? 林浩二 (都市環境教育研究会)
 - 2 NGO/NPO がつながる意味を考える 中本啓子 (財) 日本環境財団)
星野智子 (ヨハネスブルグサミット提言フォーラム)
 - 3 地域・学校で ESD に取り組むには (1) 佐藤信哉 (東京ボランティア市民活動センター)
 - 4 地域・学校で ESD に取り組むには (2) 森良 (エコ・コミュニケーションセンター)
- 5) 「教育の 10 年」の進め方に関する意見交換

■内容紹介

●「持続可能な開発のための教育の 10 年」とは

阿部治氏から「持続可能な開発」の概念が生まれた背景、環境教育・開発教育・人権教育など個別バラバラに行われてきた教育が「持続可能な未来」という共通目標の本に近づきつつある状況、2005 年からスタートする「持続可能な開発のための教育の 10 年」(UNDESD) が日本の NGO の提案から始まったという経緯などが紹介され、UNDESD を推進していく NGO/NPO のネットワーク団体への参加が呼びかけられた。

●「国連・婦人の10年」と女性運動がもたらした社会の変化

山口みつ子氏から1975年の「国連婦人年」に端を発する「国連・婦人の10年」を通して、日本の女性運動がどのように発展してきたか、そしてその成果である女子差別撤廃条約の批准、国籍法の改正、男女雇用機会均等法の成立、家庭科の男女共修の実現、男女共同参画局の設置、男女共同参画社会基本法の成立などについて紹介いただいた。政府と対等な関係を築くにはネットワークの広がりや財政面での自立が不可欠だが、資金問題に苦勞するのは今も昔も変わらない。



●地域の人材と学校をつなぎ、大人と子どもが共に学ぶ仕組み作り

加藤勉氏から「国際ボランティア年」に関する板橋での活動経験をもとに、ESDは市民が主体的に解釈を創っていく事が重要との指摘をいただいた。そしてESDは行政機関のみの仕事である限り大きな変化を生み出すことはできない、市民が主導で行政に働きかけ動かしていくことが重要、その事例として板橋で始まった総合的な学習の時間をサポートする市民ネットワークの活動をご紹介いただいた。

●ミニ・ワークショップ

1「持続可能な開発（のための教育）とは何か？」

「持続可能な開発」という言葉についての議論からスタート。「開発」の持つマイナスイメージやESDのよりよい日本語訳について、「教育」の捉え方や新しい教育活動の紹介・交流の必要性などについて話し合った。

2 NGO/NPO がつながる意味を考える

ネットワークを広げるときに障害となっていること、課題の抽出からスタート。それらを乗り越えるためには、情報を共有する仕組みを作ること、共通する重点課題を見つけること、優先順位をつけることの3点が必要項目として認識された。

3 地域・学校でESDに取り組むには(1)

ESDは学校を抜きには考えられない。学校の現場は「総合的な学習の時間」に戸惑いを感じながら体験学習などを模索している。地域の大人たちが学校にかかわるチャンスでもある。行政とNGO/NPOとの協力や、地域の市民力を高めることの重要性についても意見が交わされた。

4 地域・学校でESDに取り組むには(2)

「ESDとは地域で行われている活動をつなげることだ」という合意からスタート。続いてNGOやボランティアグループから学校教育へのアプローチの工夫について情報交換。また地域にある魅力的な資源を住民自らが見つけ、地域づくりにつなげていくこと自体もESDと言える、当事者意識が生まれることが重要、といったことも確認された。

■今後に向けて

ESDは「ESDとは何か」が決まらなないと始まらない、というものではない。ESDは誰かに決めてもらうものではない。ESDは自分が望む未来を創るプロセスに自ら参加した時から始まる。そんな風に受け止めることができる場を、これからも作っていきたい。

報告：ESD-J 設立準備世話人会 村上千里

中部

開催日：2003年4月12日(土) 13:45 - 17:00

場 所：(株)新東通信(名古屋市中区丸の内 3-16-29)

「持続可能な開発のための教育」ネットワーク・ミーティング

主 催：環境事業団地球環境基金

協 力：NPO 法人 中部リサイクル運動市民の会、NPO 法人 市民フォーラム 21・NPO センター

エコプラットフォーム東海、ネイチャークラブ東海、(有) 木文化研究所

NPO 法人 パートナシップ・サポートセンター、寺子屋プロジェクト

NPO 法人 愛知市民教育ネット、NPO 法人 こども NPO、NPO 法人 名古屋 NGO センター

環境教育事務所 PEOPLE & PLACE、ESD - J 設立準備世話人

事務局：NPO 法人中部リサイクル運動市民の会

連絡先) 住所 名古屋市中区富士見町 9 - 16

TEL 052-931-3304 / 090-7024-5090 FAX 052-931-0505

E-mail yoko-pp@smaile.email.ne.jp

担当者 中川恵子、新海洋子・本康淳子

参加者：参加者数 61 名

東海 3 県、静岡、東京

環境・開発・ジェンダー・人権・平和・国際理解などに関する教育活動を実践している

NPO / NGO、企業、学校関係者、個人ほか

スケジュール 13:30 ~ 主催者挨拶 環境事業団地球環境基金 樋口 正昇

13:50 ~ 主旨説明 中部リサイクル運動市民の会 萩原 喜之

14:00 ~ 持続可能な開発のための教育の 10 年とは？ (奨)オイスカ 木附 文化

14:10 ~ 事例報告会 地域通貨 井上 淳之典

エコクッキング 柴田 智子

環境まちづくり 仲小路 浩

開発教育 瀬尾 さとみ

フェアトレード 桜井 温子

環境学習ツール 村上 千里

15:10 ~ グループセッション

テーマ：今の活動が目指しているのは〇〇〇が△△△な社会

自分たちの教育(学習)活動を広げていくために何が必要なのか

17:00 終了

■内容紹介

中部地域において実践されているさまざまな活動が「持続可能な開発のための教育」としてどうつながっているのか（いくのか）を探るために、事例報告の場を設けました。「私の活動がいかに持続可能な開発のための教育につながっているのか」という切り口で紹介し、身近な活動がそのプロセスになりうること、分野を超えたつながりが有効性を高めることなどに気づき、共有する機会となりました。

<事例発表>

三重県四日市市で活動をしている寺子屋プロジェクト代表の井上淳之典さん：

NPO の基盤整備やコミュニテースクールのコーディネイターなどその活動は多岐に渡り、今回は実践されている地域通貨を紹介しました。

消費生活アドバイザーの柴田智子さん：

「今日環境教育は消費者教育である」という立場で、持続可能な暮らし方・食のあり方についての提案をされました。

市民参加の立場で、地域の環境まちづくりをされている仲小路浩氏さん：

市民・事業者・行政によるプロジェクトをいくつか立ち上げている愛知県春日井市の環境まちづくりパートナーシップ会議の活動についての紹介がされました。

名古屋YWCA の職員である瀬尾さとみさん：

開発教育を実践されている現場の様子や学校教育における現状についての報告がされました。

フリーで環境教育に関わる桜井温子さん：

自然食レストランのプロデュースをし、いろいろな NPO 活動の現場でスローフード・スローライフを拓けています。今回はフェアトレードについて寸劇をしながらわかりやすく伝えました。

東京から参加していただいた村上千里さん：

フリーとして、市民参加や環境教育、パートナーシップをテーマに、調査や講座の企画・コーディネートを行っている村上さんに、環境学習ツール「エコダイエット」を紹介していただき、伝えるための多様な手法について語っていただきました。

その後、事例報告を受けて、参加者が実践されている（しようとしている）活動の共有、課題の整理、「持続可能な開発のための教育の 10 年」というキャンペーンをこの地域でどう活動していくかなど、少人数のグループにわかれ、議論しました。

■今後に向けて

今回の参加者を核にしたゆるやかなネットワークをつくり、持続可能な社会を実現するプロセスをより影響力の高い教育を実践できるような、情報交換をしていきたい。「持続可能性」というキーワードを様々な教育現場に普及できるような、ネットワークにしていきたいと考えています。

報告：エコプラットフォーム東海 新海洋子



浜松

開催日：2003年6月7日（土）19：00～21：00

場 所：浜松市福祉交流センター

主 催：NPO 法人 サンクチュアリエヌピーオー、NPO 法人 ドリームフィールド
ESD-J 設立準備世話人会

連絡先：サンクチュアリネイチャーセンター Tel：053-444-5539

参加者：参加者数 38 名（団体代表者、団体会員、個人）

参加団体 21 団体 静岡県環境森林部地球環境室、浜松市環境企画課、浜松市会議員
大学教授、高校教諭、小学校教諭、養護学校教諭、幼稚園園長
在日外国人支援、浜松登校拒否親の会、ガラ紡愛好会、子供の命を守る会
NPO 法人 ドリームフィールド、サンクチュアリジャパン
NPO 法人 サンクチュアリエヌピーオー、浜松環境ネットワーク
ESD-J 設立準備事務局

参加者の傾向：テーマに教育という言葉が入っていたせいか、教育現場に関わる方々の参加が多かった。また、浜松では、これだけの立場の違う団体の長が集まるということは無かったことだが、「持続可能な開発のための教育の 10 年」のテーマに高い関心を示したのと感じた。

スケジュール：司会 星野智子（ESD-J 設立準備世話人会）

19:00 挨拶 馬塚丈司（サンクチュアリジャパン代表）

19:10 基調講演 廣野良吉（ESD-J 設立準備世話人会）

19:30 団体・個人自己紹介

20:00 パネルディスカッション

コーディネーター：廣野良吉

パネラー 星野智子

大野木龍太郎（浜松短期大学教授）

青木洋子（浜松登校拒否親の会）

佐藤邦子（外国人学習サポート協議会事務局長）

馬塚丈司

20:50 分科会 今後の地域における教育の進め方の意見交換

21:15 分科会の発表

21:30 閉会の辞

■内容紹介

意見交換会 in 浜松は、基調講演、団体の活動紹介、そして指名されたパネラーによるパネルディスカッションという流れで行われた。その後、6 つに班分けをして分科会を行い、最後に分科会の発表をして幕を閉じた。

浜松で行われた意見交換会では、まず、ESD-J 設立準備事務局のお二人のうち廣野良吉氏が会を代表して基調講演を行い星野智子氏の司会で進行した。基調講演は、この「教育の 10 年」の経緯、目的、今

後の活動に触れ、意見交換のきっかけを作った。特にこのテーマの中にある「開発」の言葉は、広報活動をする段階から質問が多かったため、基調講演中に説明を頂いた。

●パネルディスカッション

ここでは、浜松で活躍する6団体の責任者をパネラーとしてそれぞれの立場で現状、活動内容、今後の取り組みについてお話していただき、コーディネータ役の廣野氏からESD-Jとしてどう考えるかアドバイスを頂いた。これらを問題提起として引き続き6分科会に分かれた。



●分科会

分科会では、「ネットワーク」「環境教育」「学校教育」など6つのテーマを設定し、パネラーをコーディネータ役に話し合われた。最後に分科会の代表者によるまとめの中で紹介された内容をいくつか上げてみると、「ネットワーク」の分科会では、団体同士のネットワークは大切だが、名前だけを連ねて中身の伴わない名前だけのネットワークが多く、もちつもたれつ出来るような関係が築かれなければネットワークとは言えないとの意見があった。「環境教育」では、できるだけ小さいうちにいろいろな事を見聞きする体験的環境教育が必要であること。また、忙しい行政が出向いて環境教育をするよりも地元のことを熟知している自然保護団体に委託した方がいい。それにより、団体も市民も環境教育に成熟していくことが大切であるとの意見が紹介された。「学校教育」は、教育現場の先生から、最近の子どもは自分自身のことを語れない、人前で話せない、自己主張が出来ない子が増えている。また、コミュニケーションをとれない子どもにどのように対処したらよいのか、そして、とまどう教育者をどうしたらよいのかとの意見が出たが、結局結論は出なかった。

■今後に向けて

総評として、今回のこの意見交換会では、あるひとつに意見集約する必要はないこと、今後こうした立場の違いを乗り越えて、いろいろな立場から意見を交換していくことが大事であることを確認した。

参加者からは、今後も「持続可能な開発のための教育の10年」の意見交換が行われるならば是非引き続き出席したい旨が伝えられ再会を約束して2時間の交換会を終了した。その後、サンクチュアリネイチャーセンターにて茶話会が開かれた。まだまだ話し足りない人たち15名があつまりさらに2時間の懇談が続いた。

私自身も今回の意見交換会で名前は知っていても会ってお話しをするのは初めてという方々が大勢いた。どんな活動でも、まずは顔合わせからすべてが始まり、互いの意見を披露しあい、協力関係が結ばれていきます。「持続可能な開発のための教育の10年」というテーマに引き寄せられた人々が今後も集えるようにコーディネータ役を努めさせていただこうと思いながらみなさんをお送りしました。

報告：サンクチュアリジャパン代表 馬塚丈司

愛媛

開催日：2003年6月16日(月) 14:00～17:00

場 所：松山市総合福祉センター 5階 中会議室

主 催：えひめグローバルネットワーク、ESD-J 設立準備世話人会

連絡先：えひめグローバルネットワーク Tel&Fax: 089-925-0027

参加者：参加者数 56 名

参加者所属団体：NPO・市民団体（国際協力・交流系 6、環境系 2、福祉系 2、人権・平和系 3、文化交流系 3、消費者団体 2、その他 2 団体）、民間事業者（企業、開発協力コンサルタント、農業者、etc）、官庁・行政関係（環境省、JICA 四国、愛媛県民環境部、総合教育センター、愛媛県体験型環境学習センター、まつやま NPO サポートセンター、愛媛県 NPO 支援センター）、大学・学校（愛媛大学【留学生センター・法文学部総合政策学科・法文学部研究科・農学部演習林・森林教育研究室】、中島町立睦月小学校、聖カタリナ女子高等学校）、学生、松山市議会議員、その他

スケジュール	来賓挨拶	環境省大臣官房審議官 小林 光
		愛媛県県民環境部部長 石川 勝行
	基調講演	成蹊大学名誉教授 廣野 良吉

(国連経済社会理事会開発政策委員会議長・地球環境基金助成委員会座長)

パネルディスカッション 計 7 名（環境省、NPO/NGO、JICA、大学講師、等）

グループディスカッション （5 分科会により構成）

全体会・まとめ

■内容紹介

●基調講演 廣野良吉氏

ヨハネスブルグ・サミット、ESD-J 世話人会発足経緯、国内他地域の活動について説明。

●パネルディスカッション ……各方面の担い手による事例報告及び問題提起

司会：竹内よし子 氏（えひめグローバルネットワーク）

・斉藤智子氏（エコトークプランニング代表）：環境教育の担い手における「持続可能な開発・社会」への意識を高めることが必要。「持続可能な社会」の具体的なイメージの組み立てと、分野横断的な連携が不可欠。

・栗田英幸氏（愛媛大学法文学部総合政策学科講師）：教育の土台である市民社会を作り上げるための大学の機能を高めていくべき。学生が市民活動の活発化に貢献し、それらを整理する場として大学が機能するよう努力したい。

・福土庸二氏（徳島で国際協力を考える会）：国際協力現場で得た知識を日本に持ち帰り地域へ還元することで、地域の人々の環境や持続可能な開発に対する思いを深めていくことが大切。

・斉藤慎吾氏（えひめグローバルネットワーク）：市民による「持続可能な開発」のための取り組みは、資金的・時間的・人材的に制約が多い。それらを保障できれば、さらに継続的・発展的な取り組みに結びつくと思われる。

・有田敏行氏（国際協力事業団四国支部支部長代理）：独立行政法人化に伴う国民参加型国際協力の推進に期待して欲しい。四国では NGO のネットワーク化促進を支援。NGO・JICA 双方で、より対等な関

係への議論を続けていきたい。

・星野智子氏：(A SEED JAPAN)：92年のリオサミット以降、より悪化した環境・開発問題の解決に向け行動する現場に、次世代を担う若者を送り出す機会や、それを担うNGO・NPO等の組織が育つことが大切。

・小林光氏：(環境省大臣官房審議官)：環境省が行ってきた従来の研修・体験学習等の事業に加え、個別の市民活動に対する補助を制度的に実施する政策の必要性を感じる。環境教育の推進を図る議員立法に期待したい。

・廣野良吉氏：日本でNGOの活動環境は資金的・人材的に厳しいが、ここ10年で随分と育った。国会議員の協力なども得て、NGOと行政の連携の場を、全国地域レベルで増やすことが重要。



●グループディスカッション ※キーワードを抽出し分科会を構成、議論を展開し最後に発表

分科会 A-1 キーワード：総合的な学習、義務教育

子どもの学ぶ場所である地域と学校が互いに補完しあい、双方で持続的な取り組みが行われることが重要。また、子どもの手本となる大人の態度と自覚が不可欠。

分科会 A-2 キーワード：総合的な学習、義務教育以外の教育

「総合的な学習」で、分野別の問題を考えるとときの生徒の基礎知識の不足、受験教育への時間配分過多が問題。生徒の学習意欲をいかに引き出すかについて議論。

分科会 B キーワード：第一次産業、農業、地産地消

学校給食の時間は、食べ物の循環、流通のあり方、地元の農家との連携を考える機会として相応しい。残飯の堆肥化と作物の栽培など、実践的な教育手段としても利用できる。

分科会 C キーワード：青年、参加、全国、地方

学生と学外のネットワークが希薄なため、地域で市民活動をする人や体験学習ツアーなどの情報が入りにくい。情報が効率的に流れるネットワークの構築が必要。

分科会 D キーワード：四国、NGO、ネットワーク、人材育成

人材育成に必要なネットワークと情報交換を進展させるため、インターネットを利用した情報共有する場が必要。NPOの中間支援組織等は、情報集約の役割を担うのに適切。

■今後に向けて

ESDの理念は、曖昧ながらも共有されたというのが実感。ただ参加者には、理念よりも、持続可能な社会の具体的なイメージ、及びそれを推進するしくみについて、具体性を求めている声が多い。例えば短期的なメリットのために繋がり、長期的にはESDの推進に結びつく形のネットワークが必要ではないか。さしあたり、地域ミーティング後は、具体的に掘り下げる必要を感じている参加者が再び集まり、フォローアップ会議や学習会を開催し、現在に至っている。

報告：えひめグローバルネットワーク 斉藤 慎吾

岐阜

開催日：2003 年 11 月 16 日 (日) 10:00 ~ 15:30

場 所：岐阜大学全学共通棟 105 号室

.....

主 催：NPO 法人 地球の未来、エコプラットフォーム東海、ESD-J

後 援：NPO 法人 ぎふ NPO センター、岐阜県

連絡先：NPO 法人 地球の未来 TEL：0573-28-2968

参加者：参加者数 33 名 (NPO、大学、行政等多様)

スケジュール 10:10 挨拶 (岐阜大学地域科学部教授 糟谷志郎)

10:20 話題提供①村上千里 (ESD-J 事務局長)

②松本恵 (NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター)

11:00 パネルディスカッション

コーディネーター：駒宮博男 ((特活) 地球の未来理事長)

パネラー ①木平英一 (名古屋大学大学院環境学研究科助手)

②藤田正幸 (三菱総合研究所エネルギー研究本部主席研究員)

③箕浦健二 ((特活) 地球の未来副理事長)

④樋口克孝 (飛騨美濃千年持続社会を作る会代表)

⑤渡辺昇 (岐阜県西濃地域振興局環境課長)

13:30 交流集会

コーディネーター：村上千里 (ESD-J 事務局長)

.....

■内容紹介

●話題提供

【村上千里】…… 国連のこれまでの活動 (〇〇の 10 年) と、2005 年から 2014 年までの 10 年間に行うことが決定されている「国連・持続可能な発展のための教育の 10 年 (ESD)」と、1970 年代のローマクラブから、リオ、ヨハネスブルグに至る環境問題の国際的な動きの解説。

【松本恵】…… NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センターの活動報告。炭焼き釜を地元のマンパワーを生かしながら作った話。地元の人々との連携が、炭焼き釜づくりを契機に確立されていった。

●パネルディスカッション

【趣旨】持続可能教育に先立つ『地域デザイン』の必要性と、地域デザインを基礎とする持続性教育のあり方を模索する

【合意形成手法の説明 (駒宮より)】ニュージーランドのオークランド近郊の町で、実際に使われている合意形成手法。会議をディスカッションと意思決定の 2 種類に分け、それぞれの会議で色のついたカードを参加者にわたし、参加者の意志を確認しながら会議を進める手法。

【木平英一】…… 物質循環を分かりやすく解説。物の循環を、『肥満型』、『超やせ型』、『健康型』に分類。『肥満型』は、物が貯まってしまう社会構造、『超やせ型』は、物が出ていくだけの社会構造、『健康型』は、物が循環している社会構造。

【藤田正幸】…… 『自然資本主義』について。そもそも、資本主義とは何か、まずは日本人の感覚のずれ？を指摘。お金中心の資本主義から、本源的資本である自然を唯一の資本と考える自然資本主義への転換の必要性を解説。また、現在のエネルギー利用効率の低さ等を指摘。さらに、『自然が生み出す資本を、自然の歩幅に合わせて利用』するという『ナチュラルステップ』的な考えを紹介。

【箕浦健二】…… 郡上地域におけるエネルギー自給の見通しと、地域の連携について。木質バイオマスによる発電をシミュレートすると、自給率は何と2,000%以上になる。その他地域で有望視されるものとして、風力、簡易水力、太陽光（発電だけでなく、輻射熱を直接利用）等、エネルギー自給の可能性は十分。また、地域ごとの分散型エネルギー供給体制が必要であるという提案がなされた。

【樋口克孝】…… 現在の地方における『持続不能問題』の中核である「財政問題」の解説。国、地方とも、財政は逼迫しているが、いわゆる公金（税、社会保険等々）に対する依存度が高い郡部の経済において、財政問題は極めて深刻な状態にある。財政の破綻は、地域の公共サービスを崩壊させる危険性があり、直近の持続不能問題として真剣に考えざるを得ない。

【渡辺昇】…… 地域の持続デザインに基づく環境教育のプラットフォームとして開始された『地球環境塾』の解説と、環境行政の紹介。これまであまり重視されなかった『環境哲学』、『環境経済』という視点をカリキュラムに取り込み、しかも、産官学民から講師を選抜し親子での参加を基本とする環境塾の紹介。また、輪之内町での環境基本計画策定やぎふ西濃地域化学物質コミュニケーション懇談会の紹介も合わせて行われた。



●交流集会

まず、持続可能社会がどのような社会か、参加者全員にイメージしてもらう。参加者のイメージを、環境、社会、経済、人という4つのカテゴリーに分類。円形に座った中央に模造紙を置き、円形に示された4つのカテゴリーにポストイットを貼ってもらう。この作業で、参加者全員が、どのように持続可能社会をイメージしているかを共有してもらい、と同時にそれぞれのイメージに対して意見を聞いた。

■今後に向けて

NPO、行政、企業、大学と、様々なセクターのパネラーによる、経済をも含めた話題提供があり、参加者には好評だった。時間が足りなかったのが残念。

報告：NPO 法人 地球の未来理事長 駒宮博男

広島

開催日：2004 年 1 月 17 日 (土) 13:00 ~ 16:50

場 所：広島県立総合体育館大会議室

主 催：ESD-J 広島準備会（同日をもって ESD-J 広島に変更）、ESD-J

連絡先：(有) 人間科学研究所 内 ESD-J 広島事務局 担当者：近田美智子

住所 〒733-0004 広島市西区打越町 11-8-207

TEL：090-6666-0021 E-mail：tim1967@nifty.com

参加者：参加者数 28 名（ESD-J からの 3 名含む）

NGO、教師、市民、教育委員会、企業、行政、宗教関係者、弁護士など

各自の活動分野は平和教育、環境教育、開発教育、福祉教育、人権教育、国際協力、その他多様であり、複数の分野にまたがって活動を行っている人もいた。

スケジュール (司会進行 渡部朋子)

あいさつ (近田美智子)

第 1 部 (130 分)：

ESD-J 副運営委員長：池田満之、ESD-J ネットワークプロジェクトチーム：辻英之より、ESD、UNDES、ESD-J の経緯や活動概要、日本国内外の最新情報について説明。質疑応答有り。

リフレッシュタイム (志賀誠治)：参加者の緊張をほぐし語り合い易くなるために。ESD-J お花理論の説明 (ESD-J 事務局長：村上千里) 及びお花の作成 (参加者全員) 休憩 10 分

第 2 部 (90 分) (進行：志賀)：ワークショップ形式で次をキーワードに意見交換

ESD は何人事？

広島の ESD、広島発の ESD ‘持続可能性’

‘教育’ についての思いをつむぐ共通のキーワードを入りに

ライブでやりましょう

おわりに (近田)

■内容紹介

●お花理論

例えば環境教育に携わる上での価値観や育みたい能力などは、他の分野（開発教育等）と共有するものもある。それを図式化したものが「ESD-J お花理論」。

ある教育分野を 1 枚の花びらとみなし、花びら同士が重なる部分、すなわち複数の教育分野が共有する部分を確認することで、協力し合ってできること等を認識できると思われる。

花びらはもっとあるだろうけれども、当日は環境教育、平和教育、人権教育、福祉教育、開発教育、そして 6 枚目を〇〇教育として「その他」として扱った。

ESD や SD に照らして、育みたい力、大切にしていきたい事を各自、(自分のバックボーンに照らし合わせながら) 自己紹介を兼ねて、付箋紙に 3 枚ずつ記載して貼っていった。

出来上がったお花の核の部分からいくつか抜粋

社会の仕組みを変える行動につなげる、多様なものの考え方を知る、自尊感情、関わり方を知る、安心感を基盤にした社会、自立、自律、対話、ネットワーク、価値や美



●第 2 部ワークショップ

DESD になったから始めるのではなく、DESD をいままでできなかったことをするチャンスとしてとらえ、自分にとって、という発想で語り合った。以下に意見の概要。

- ・平和は広島の専売特許ではないが、それを広げていくことは広島の大きな役割。
- ・広島には、特に原爆にまつわるエピソードを持つ多くの場(川等のフィールド)がある。これらを平和を考えるテキストとして、たくさん用意したい。各年齢層、ライフステージに合わせて。
- ・「持続性」はパイを取り合うことではなく痛みをどれだけシェアできるか、ということであり、それを共有できれば基盤ができるのではないだろうか。
- ・現在、各々が点で活動しているところを、線としてつなげ、そして面へと広げていきたい。
- ・「何とかしたい」というものを共有し実践につなげていきたい。
- ・共有したくてやっているのに共有することを押し付けてしまっている。押し付けない、共に思いを出しながら学びあっていく学びのあり方が共通したテーマではないか。
- ・何が問題でどう解決していくのか、課題 = 花びらは様々であり、ESD はそれぞれが全部つながっているチャンスである。
- ・多様性を認めた上で自分の大切なものを伝えていけるように。ESD がその場となれるように。

■今後に向けて

主催である ESD-J 広島は、UNDESD を一つのきっかけとして、その先々までの息の長い活動を目指しており、多くの NGO、市民、企業、学校関係者等が「平和」や「教育」といったキーワードにより、ゆるやかにつながることを活動の主な目的としている。

今回のミーティングでは、30 名近い参加者が、ESD あるいは SD に各自が関わる理由を見つめ直し伝え合い、核となる共通のキーワードを探しながら「広島」としての ESD のあり方などについて考えた。

広島では好むと好まざるとに関わらず、「平和」というキーワードが必ず一つの側面として当活動に関係してくる(出席者の平和への思いも様々であった)が、それ以外にも次回のミーティングへつながる多くのメッセージが出された。特に SD に必要なものとして、次のようなキーワードが浮かび上がってきた。

相互理解、自尊感情、自律と自立、次世代がさらに次の世代に教える場の必要性、ネットワーク、多様性

これらのキーワードを基に、次回以降も、一人でも多くの“地球市民”とつながりあえるよう、地道にじっくりと関わっていききたい。

まさに「多様な」参加者が、互いにつながり合えた事は、今回のミーティングの最も大きな成果だった。

報告：ESD-J 広島 近田美智子

沖縄

開催日：2004 年 1 月 17 日(土) 17:00 ～ 18 日(日) 9:30

場 所：那覇市立森の家みんな（沖縄県那覇市首里儀保町 4-79-8）

「持続可能な開発のための教育の 10 年」をひも解き、つなぐ

主 催：NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄、ESD-J

連絡先：NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄

住所 那覇市首里鳥堀町 4-44-1

電話：098-886-3037 FAX：098-886-3001

参加者：参加者数 24 名（環境系団体、国際協力系団体、その他地域ミーティングに興味のある個人）

スケジュール

1. 開会
2. 主催・共催者あいさつ… NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄代表 古我知 浩
ESD-J 世話人 大島 順子
3. 進行スケジュール説明…NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄事務局長 福岡 智子
4. アイスブレイク…進行役：NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄事務局長 福岡 智子
- 他己紹介
- フィリップディスカッション
5. 夕食（フェアトレード香辛料を使ったインドカレーをみんなで食べる）
6. 『持続可能な開発のための教育の 10 年』の説明 …ESD-J 運営委員 大島 順子
7. 意見交換会… 進行役：NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄 藤井 晴彦
8. 交流会
9. 就寝・朝食・掃除
10. ふりかえり・これからの活動に向けて
…進行役：NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄代表 古我知 浩
- フィリップディスカッション
11. 閉会

■内容紹介

●開会

環境・国際協力に関わる団体を中心として 24 名の参加者が集まり、参加者全員の顔が見えるような円形に座り、沖縄における地域ミーティングが始まりました。

●主催・共催者あいさつ

主催者である ESD-J 世話人 大島順子氏と NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄代表 古我知 浩氏から、本地域ミーティングについての趣旨の説明が参加者に行われました。

●アイスブレイク

NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄事務局長：福岡智子氏の進行により、アイスブレイクもかねて、参加者同士 2 人ペアになり自己紹介をした後、各ペアで参加者全員の前に出て、他己紹介が行われました。



その後、参加者全員に対して、『持続可能』とは？『開発』とは？『教育』とは？『10 年』とは？『持続可能な開発のための教育の 10 年』とは？の質問が順番に出され、一人ひとりが持っているイメージを、4 用紙に一人ひとり書き上げ、発表しあいました。この作業によって、一人ひとりそれぞれの単語に対するイメージが異なるということが共有されました。

●『持続可能な開発のための教育の 10 年』の説明

ESD-J 世話人の大島 順子氏によって、持続可能な開発のための教育の 10 年の説明と、ESD-J の紹介が行われ、質疑応答もされました。

●意見交換会

進行役を NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄：藤井晴彦氏が行い、ディスカッションが行われました。ここでのルールとして、参加者の中から 3 人が前に出て、前にいる人以外は発言できず、発言したい場合は前に行き、前にいる 3 人のうち 1 人と交代してから発言しなければならないというルールでした。

●ふりかえり・これからの活動に向けて

進行役を NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄代表：古我知浩氏が行い、『今回のミーティングで得たもの』『10 年後の自分』『これから自分ができること』を 4 用紙に一人ひとり書き上げ、発表しあいました。

■今後に向けて

最後のふりかえりの中で、参加者の中から「第 2 回目の地域ミーティングを、私が幹事となって開催します!」という声が出てきました。そして、「第 2 回目は今年の夏に行いましょう。そして、テーマは『子どもの参加』がいいかな」ということになっています。

今後、沖縄地域においては、再度地域ミーティングが開催されるようになり、沖縄地域における持続可能な開発のための教育について、意見交換が行える場作りのきっかけが生まれました。今後は、参加者一人ひとりのフィールドにおいて実行に移されていくことが期待できます。

報告：NPO 法人 エコ・ビジョン沖縄 古我知浩

新潟

開催日：2004年1月31日(土) 13:00～2月1日(日) 16:30

場 所：点塾(宿泊型企業研修施設；新潟市長潟 3-6-2)

ESDで地域が見える・私が見える・地球が見える

主 催：ESD 地域ネットワークにいがた、ESD-J 他

連絡先：ESD 地域ネットワークにいがた Tel&Fax:025-233-6236 (市嶋)

協 力：共催 / 後援 / 協力団体多数

参加者：参加者数 47 名 + ゲスト 10 名 (まちづくり関係、環境教育関係、福祉関係、教育関係等)

スケジュール [1日目] 1月31日

13:15 基調報告「ESDの経緯 / 現状と課題」

13:30 問題提起 1「教育ということばの持つ意味」佐川通(ホリスティック教育協会事務局)

14:00 問題提起 2「ESDと開発教育～地域と地球を結ぶ～」伊藤通子(富山エコテクノロジー研究会理事)

14:40 パネルディスカッション

「ESD どう受けとめたいか」～つながる意味は？経済と環境の共存は？共通の課題は何？～

開発教育：伊藤通子(富山エコテクノロジー研究会理事)

教育全般：佐川 通(日本ホリスティック教育協会)

NPO 支援：金子洋二(NPO 法人 新潟 NPO 協会)

学校と地域：塩原昭夫(沼垂小学校教諭)

地域づくり：大滝 聡(NPO 法人 まちづくり学校)

社会福祉：竹田一光(社会福祉士会ばあとなあ新潟)

ジェンダー・人権：堀内一恵(女性財団)

平和・食糧：杉本祐一(フリーフォトジャーナリスト)

コーディネーター：森 良 (ESD-J、エコム代表)

17:30 ポスターセッション(参加者による)

19:00 夕食～交流会 特別プログラム 杉本祐一によるスライド上映「人間の盾とイラク戦争」～世界に銃口を向けるな～

[2日目] 2月1日

09:45 学びのスタンスづくり～ネットワークをコーディネートするために～

10:15 選択プログラム PART1: ワークショップ「ESDと私」

①環境と開発と ESD ②ボランティア活動と ESD ③学校と社会と ESD ④地域づくりと ESD

12:30 問題提起 3「学校の森といのちのつながり」山之内義一郎(日本ホリスティック教育協会相談役)

13:30 選択プログラム PART2: ワークショップ「何が本当に問題なの？」

①開発教育(DE) ②平和教育(PE) ③人権教育(HRE) ④環境教育(EE)

15:15 全員参加のワークショップ「ESDのビジョンデザイン」～地域に帰ってやれること～

16:15 ふりかえり / まとめ

■内容紹介：

●基調報告 ESD-J 辻英之さん

経緯・現状・課題をパワーポイントとレジュメを使いわかりやすく説明。シャンパングラスを使った「富の不均衡」の部分が印象的だったというふりかえりがあった。短時間ながら、基本的なことを確認する意味で有意義であったと思う。

●問題提起

①『教育ということばの持つ意味』 佐川通さん：校長時代の「学校の森づくり」の活動から見てきたことについて教師としての自戒をこめたお話をいただく。教科学習という部分の学びから全体の学びへとシフトすることにより、自分の喜びのために学ぶという実感が湧くということが重要。

②『ESDと開発教育～地域と地球を結ぶ～』 伊藤通子さん：自身が大切にしている半径 5km の生き方が、世界＝地球につながると信じていろんな活動をしているが、いまひとつ周りにリアリティーを感じてもらうことができていない。

そういう意味では“あやしい開発教育”や“あやしいワークショップ”だらけなのかもしれない。いままでは、理念を大切にしてきたが、これからは逆説的に“方法の時代”のような気がするということばが印象的だった。

③『学校の森といのちのつながり』 山之内義一郎さん：佐川さんの話と重なり合いながら、教育の根源と学校教育の持つ硬直したしくみに対しての幅広い視点を話していただく。学校の森づくりを体験して、“一点を押すと、ふっ立つ（たちあがる）”という気づきが生まれてこと。それは、“宿るいのちのつながり”を感じたこと。教育は個人的目標と社会的目標の両面があること。地域の教材性を生かしたカリキュラム構成理論の確立の重要性。



●パネルディスカッション コーディネーター：森 良さん

自己紹介を兼ね各ゲストが抱える課題等について問題提起してもらう。この段階になると共通の課題が見えはじめ、ゲスト同士が共感している姿と参加者がそれぞれの活動ジャンルに置き換えて翻訳しようとしている雰囲気が見え、多様なジャンルのゲストと参加者とが響き合い、増幅していることが感じられる。ゲストの大滝さんが“自分はいいことだと思って話したり活動したりしている向こう側の風景が見えない”ということと言われ、伊藤通子さんの思いとも通ずるはがゆさのようなものを皆が共有したのではないかな？

●ポスターセッション：ファシリテーター：伊藤希代子さん

バースデイリングでの自己紹介と活動発表、その後交互にセッションを行い、交流会のプレ的位置付けとなった。

●特別プログラム『人間の盾とイラク戦争』 杉本祐一さん

ほとんどの参加者にとっては、イラクの生々しい現状を解説付きで見るのは始めてだったようだ。徐々にそここであった会話が消え、静寂のうちに杉本さんの早口での説明とスライドが切り替わる機械的な音だけが場を占めてしまうようになった時、それぞれのカルチャーショックといらだちのようなものがみえた。

●選択プログラム

PART1『ESD と私』……サブテーマ「持続可能な自分の地域とは」

テーマをもとづき①環境と開発、②ボランティア活動、③学校と社会、④地域づくりの切り口で、あえて参加者が今まで関わってこなかったジャンルのワークに参加してもらった。立脚点を変化させることで、新しい気づきや心の動きが生じ、グループダイナミズムがはっきりと感じられた。

PART2『なにが本当に問題なの？』……サブテーマ「これからの〇〇教育は」

パートIでの問題意識を持ちながら、興味のある教育ジャンルでワークに参加。問題提起での教育論がかなり色濃く影響し、考え方を自分のものにしようという意識がかいま見えた。

●ワークショップ『ESD のビジョンデザイン』＝「地域に帰ってやれることは？」

地域別のグループ編成でワークをするが、時間不足のため議論が深まらずに終わる。しかし、時間の問題以外にこれまでのプログラムでの気づきが、現実の自分の地域に置き換えた場合に乗り越えられない壁に突き当たることに愕然としてしまっている姿が多く見受けられた。

■今後に向けて

最終プログラムのつまづきこそが、問題の原点のような気がする。そこに仕掛けていくことが、これからの ESD - N の課題であることが、はっきりと見えた。

同様のミーティングを県内の地域で出前的に開催することと、同時平行で今回の参加者中心に研修合宿を行い、人材養成をはかること。さらにその情報をフィードバックするための、教育や行政をまきこんだ編集チームを編成し、協働体勢で臨むこと。

報告：ESD 地域ネットワークにいがた代表 市嶋 彰

関西

開催日：2004 年 2 月 3 日 (火) 14:00 ~ 17:00

場 所：大阪 NPO プラザ (大阪市福島区)

－ なんやねん ESD? どうするねん ESD!? －

主 催：NPO 法人 関西 NGO 協議会

協 力：地球市民教育総合研究所

連絡先：NPO 法人 関西 NGO 協議会

〒530-0013 大阪市北区茶屋町 2-30 TEL 06-6377-5144)

参加者：参加者数 39 名 (ほとんどが NGO・NPO のスタッフ、もしくは大学教員)

参加者地域：大阪・京都・兵庫・奈良・和歌山

スケジュール

①共催者挨拶 (15 分)

関西 NGO 協議会副代表：清家弘久

持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議：村上千里、新海洋子、池田満之)

②基調講演 (15 分)

(帝塚山学院大学 / 岩崎裕保)

③ワークショップ I (60 分)

「DESD が始まる前の 10 年間を評価する - ディケイド分析 & フォースフィ
ールド分析を用いて -」(地球市民教育総合研究所 / 新田和宏)

④ワークショップ II (60 分)

「DESD の未来 - タイム・ライン -」(開発教育協会大阪事務所 / 荒川共生)

■内容紹介

「ESD 関西セミナー」は、関西 NGO 協議会を中心にして、7 名の実行委員によって企画された。セミナーの目的は、「アンテナ」であった。つまり関西において、ESD を実践・展開するにあたって、実行委員の間において共有体験を確保しつつ、そこから今後の活動や実践の方向性について、その展望を見据えることであった。今後の展望については、後段の浜本裕子さんがまとめた通りである。中でも、「ESD 関西」の立ち上げは、思わぬ副産物だった。その意味で、「ESD 関西セミナー」のインパクトは誠に大きいものがあったと評価できる。

さて、セミナーの内容であるが、そのプログラム・ストーリーは、いたって単純である。すなわち、基調講演を踏まえつつ、持続可能性 / 不可能性の観点から、関西における過去 10 年を振り返り、かつまた今後を展望しながら、改めて教育の役割を問い直すというわけである。日本では「失われた 10 年」と呼ばれる

ポスト UNCED (リオ・サミット /1992 年) の 10 年について、とりわけ関西の過去 10 年について振り返りながら、WSSD (ヨハネスブルク・サミット /2002 年) 以降、とりわけ関西の未来について展望し、それを基点に置き、教育の果たすべき役割を問い直す作業を試みた。

「持続可能な開発のための教育」は、通時的な視点、つまり歴史的な連続性と非連続性という視点を持ち合わせる必要がある。そうでなければ、「持続可能性」は語れない。それ故に、「ESD 関西セミナー」では、過去と未来にこだわった。考えるためのツールとして、フォースフィールド分析とタイム・ラインというツールを用いた。

ワークショップにメンバーとして参加した実行委員から、持続可能な社会を創造するためには、やはり教育的アプローチが必要であるという指摘が多かったという。また、そのために従来の開発教育や環境教育とは別物としての「持続可能な開発のための教育」を創る必要があるという指摘は特筆に値すると思う。

報告：ESD 関西セミナー実行委員：新田和宏（地球市民教育総合研究所）



■今後に向けて

関西地域ミーティングは、地理的にも分野的にも広範囲の参加者を得て成功裏に終わった。「持続可能な開発のための教育」についての理解はまだまだだと言えるが、ESD がさまざまな分野の人たちを集めるインセンティブになっていることは確かである。

「持続可能な開発のための教育」を一言で言い表すのはむずかしい。だからこそ、ESD をベースに、さまざまな教育分野で活動してきた人たちが、お互い理念や実践をぶつけあいわかちあうことに、大きな意味があると思う。

ミーティングの中で、基本的な用語の理解が、たとえば環境分野と開発分野では違っていたりしたが、それらのすりあわせをしていくことも今後の課題といえよう。

今回の地域ミーティングの、これからの 10 年を考えるワークショップの中で、「教育」がキーワードになっていたのは大変示唆的である。また、今回のミーティング参加者のネットワークを活かしていくためにも、継続した活動の場が望まれる。

そこで関西地域では、より地域に根ざしたネットワークと活動を展開していくために、ESD- 関西を立ち上げることになった。4 月 22 日に設立準備会を行う予定である。東京を中心とする活動だけでなく、地域での実践を展開、発信していくことが大切と考える。

さっそく、6 月 5 日 (土) に、京都ノートルダム女子大学で開催される「国際理解教育学会」にて、「ESD- 関西」としてシンポジウムを開催することも予定されている。

関西風味の ESD- 関西の今後の展開に、個人的にも期待するところである。

報告：ESD 関西セミナー実行委員：浜本裕子（大阪 YMCA）

富山

開催日：2004年2月8日(日) 13:00～17:00

場 所：富山県総合福祉会館 サンシップとやま 601号室

どこから始める？ 誰から始める？ 何から始める ESD

主 催：NPO 法人 エコテクノロジー研究会、ESD-J

連絡先：NPO 法人 エコテクノロジー研究会

住所 富山県富山市本郷町 13 富山高専内 (ecotech_res@yahoo.co.jp)

URL：http://www.toyama-nct.ac.jp/event/aset/npo/

協 力：環境教育ネットワークとやまエコひろば

TIE とやま国際理解教育研究会

富山 YMCA

参加者：参加者数 33 名 (主催団体の会員、県内 NPO・NGO、教育関係者 (小・中・高・高専・大学・養護)、自治体職員、学生、一般)

スケジュール 13:00 «主催団体よりご挨拶» エコテクノロジー研究会 代表理事 丁子哲治

13:10 «ESD とは»「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議：辻 英之氏・新海洋子氏

13:40 «話題提供 - 富山の ESD - »

① あそあそ自然学校と自然体験の役割 あそあそ自然学校代表 谷口新一氏

② 富山 YMCA 地球っこスクールの子ども達 富山 YMCA 堤町館長 土肥和美氏

③ 高校での活動実践紹介 ― 今どきの高校生にエネルギーもらって!―

富山県立魚津高校教諭 東山潤子氏

④「おもしろ科学実験 in 富山」実行委員会の活動

富山大学教育学部 教授 市瀬和義氏

14:45 ティーブレイク

14:55 «ESD を考えるワークショップ»

持続可能な開発をどう捉え、何から始めるか

とやま国際理解教育研究会 運営委員 定村 誠氏

■内容紹介

●主催団体よりご挨拶

大量生産・大量消費・大量廃棄という現代社会を資源循環型の社会へ変えていくための科学技術のことを、私たちは「エコテクノロジー」と名づけ、これを推進していくため、富山県内の研究者や技術者が中心となり、2003 年、富山県にエコテクノロジー研究会を結成した。持続可能な社会作りに向けて、技術革新と社会改革、そして、それを支えていく市民社会が大切である。

エコテクノロジー研究会では、持続可能な開発のための教育に、科学技術からのアプローチで取り組んでいこうと思っている。

● ESD とは

「持続可能な開発のための教育の10年」について経緯と現状、ESD-Jの紹介と今後の取り組みについて、他県の地域ミーティングの紹介 など

● 話題提供：富山の ESD

(1) あそあそ自然学校と自然体験の役割

主体性を持った子供たちを育てるには、自然体験が大きな役割を果たす。自然体験活動では「丸ごと認められる」「自然の正しさに向き合う」という貴重な経験ができる。過疎の地域に住みながら生活の場で展開している活動とその信念を紹介。



(2) 富山 YMCA 地球っこスクールの子ども達

多様な子供達が集まる地球っこスクールでは、屋内・屋外活動を通じて、命の大切さや生きる力を学んでいる、また、自分たちの地域の環境を理解するためには、正しい科学の知識と姿勢が大切なので、環境科学実験プログラムを取り入れている。

(3) 高校での活動実践紹介

前任校では、生徒と共に学校という枠を飛び出して地域の市民グループと一緒に環境教育や地球市民教育を実践してきた。現在の受験校では、授業の中で工夫を凝らすことによって、地域や世界への視点を育成している。学校が開かれることが大切。

(4) 「おもしろ科学実験 in 富山」実行委員会の活動

生き生きと楽しい理科を富山で、という目的で活動している。実行委員会は、教師、科学館学芸員、親、会社員、学生、医者など多様な人々。竹を切り出すところから作ったエジソン電球などでものづくりの楽しさと科学への興味・関心の喚起をねらう。

● ESD を考えるワークショップ

持続可能な開発をどう捉えるか。住み良い地域とはどんな地域か。その実現に対して私たちはどう関わっていくのか。ESDの10年の始まりに向けて富山で何をするのか。このようなテーマについて全員参加型のWSで意見交換を行った。

自分たちにできそうなことがいくつか具体的な案として出され、今後もESDをキーワードに集い1泊してじっくり学び合う機会を作りたい、という意見もあった。

■ 今後に向けて

富山でESDを考え実践していくための第一歩と位置づけて開催した。ESDをキーワードにどのような人が参加するのか大変不安であったが、普段は会う機会のない多種多様なバックボーンを持った人が集まり、意見交換できたことは有意義だった。しかし、設定した時間では、お互いを深く理解したりESDについて深く考えることは不十分だった。

今後は、富山におけるESDの実践に向けた長期的な戦略を練るため、参加者の中からコアメンバーを募り、ネットワークを作り次へつなげていきたい。

報告：NPO 法人 エコテクノロジー研究会 伊藤通子

奈良

開催日：2004 年 2 月 11 日 (水) 14:00 ~ 17:00

場 所：奈良県解放センター (奈良市大安寺 1-23-1)

主 催：NPO 法人 ほっとねっと、ESD-J

連絡先：NPO 法人 ほっとねっと

住所：奈良市大安寺 1-23-1 奈良県解放センター 2F TEL：0742-64-0015

HP：http://www.bllnara.jp/hotnet/top.html e-mail：hotnet@bllnara.jp

担当者) 奥 e-mail：sukihu@smile.ocn.ne.jp

参加者：参加者数 11 名

(NPO 法人 奈良 NPO センター (問題提起)、ほっとねっと関係、広島 ESD-J、ESD-J)

スケジュール

14:10 開会・スケジュール説明 (担当：ほっとねっと・奥)

14:15 自己紹介 (1 人約 1 分で全員 / 名前とミーティングに何を期待しているか等)

14:25 ESD-J プレゼン (ESD-J 運営委員・新田和宏)

14:35 ミーティングで何をめざすか (ESD-J 運営委員・森良)

14:40 問題提起「奈良と ESD 〜 兆し…これから考 〜」

(スピーカー：NPO 法人 奈良 NPO センター・仲川順子)

15:15 休憩

15:25 ミーティング (コーディネート：ESD-J 運営委員・森良)

17:00 終了

■内容紹介

●人権 NPO「ほっとねっと」は、21 世紀を「人権の世紀」にするために一人ひとりができるところから、できることを始めよう！という趣旨で 2002 年 3 月に設立した NPO である。「人権教育のための国連 10 年」の推進をはじめとして、人権、平和、子どもの「居場所」、まちづくり等の課題に取り組んでおり、人権問題への関心は高いが、ESD が掲げる環境、開発等への接点が弱い。

● DESD に関しても、新田さんのプレゼンで初めて、ESD の言葉そのものや、ヨハネスブルクサミットからの経緯、基本等を知った状態だった。

●新田さんの「課題をみつけ共有することが ESD 推進のキーポイント (意識)」や、森さんの「ESD はコミュニティ (市民自治) の再生」等の提起を受け、ミーティングが始まった。

●仲川さんからは、1996 年秋に奈良で開発教育セミナーを開催したことをきっかけに、地球市民フォーラムなら、なら NPO プラザ、NPO 法人 奈良 NPO センターを設立し、県内の多様な組織・個人を結集してきた経過が報告された。また、国際理解教育を中心とした取組の中で、子どもの自己表現、コミュニケーションの弱さが顕著になり、「子どもの参画」の推進者ロジャー・ハートさんの奈良での講演会を成功させ、

地域で子どもたちの自主的な学びを応援する「もうひとつの学び舎」プロジェクトを多様な協力で進めている報告がされた。まさに ESD そのものといった内容だが、協働面での課題があり、DESD と結びつくことの大切さが提起された。

● 3 者の話を受けての感想や思いを出し合う形でミーティングをすすめた。

● 部落解放運動に関わっているメンバーからは、地域コミュニティの課題解決の手法が「行政依存型」になってしまっていることや、国際的な人権教育の手法に学びきれていないこと、他の人権課題に取り組んでいる人々

との連携が弱いこと等への反省と、それらを解決していくために、ESD をどう活かすか考える必要があるという意見が出された。また、人権問題だけでなく、他の多様な課題への関心が広がってきている（プレイパーク、在住地の交通アクセス等）ことも出された

● 他にも、「行政」も市民の一員であるという自覚をすべき、子どもも市民として扱うことが重要、教育現場での子どもの参画の取組をどうするか、住民に課題を共有するという意識が育ちにくい（＝大阪に通勤する人が多いという地域性）、といった問題意識が出された。

● ESD-J 広島近田さんからは、自身の ESD への接点経過や広島ミーティングの経験に基づき「まず色々な人たちが会いゆるやかにつながっていくこと」が ESD 推進のために大事だという原則的・確信的な助言もあり共感できた。

● 様々な課題を・誰がどうつながるか・というテーマでのまとめの段階になり、仲川さんの提案で、「奈良に必要なもの」を1つだけポストイットに書出し共有するワークを行った。その中で「子どもの居場所」が共通のキーワードとして浮び上がった。更に、仲川さんから「子どもミュージアム」（注：参照）の研修を企画している話が出され、一気に「奈良どこでも（子ども）ミュージアム」の開設が、奈良 ESD 推進のための結集軸になるのではないか…という展望が共有できた（…と思う）。

注：子どもミュージアム：ハンズ・オンの展示（単に見るだけの展示ではなく、自由に触れ、遊ぶことができる展示）を基本とした子どものためのミュージアム（参考：京都子どもミュージアムをつくる会 HP）

■今後に向けて

今回は、担当である私の力量不足で、多様な結集ができなかったことを強く反省している。第2回を必ず実現したい（遅くとも6月までに）。その時は、ESD-J 広島近田さんと情報交換等しながら、また、多様な結集を実現している、NPO 法人 奈良 NPO センターの仲川さんの協力も得ながら、子どもの居場所づくり＝奈良どこでも子どもミュージアム（仮称）を結集軸として、ESD 推進のためのネットワークをめざしたいと決意している。

報告：NPO 法人 ほっとねっと 奥 正文



2 ESD 全国ミーティングレポート

開催日：2004 年 3 月 6 日（土）13:00～17:30

場 所：立教大学 太刀川記念館 3F 多目的ホール（東京都豊島区西池袋 3-34-1）

動き始めた「持続可能な開発のための教育の 10 年」 私たちは何を実現するのか？

主 催：「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J）

参加者：83 名（ESD-J 運営委員 12 名、地域ミーティング報告者 8 名、団体正会員 6 名、個人正会員 7 名、個人準会員 8 名、非会員 35 名、海外ゲスト 1 名、ESD-J 事務局 5 名）

スケジュール：13:00 開会 司会：ESD-J 大島順子

【第一部】動き始めた「持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD）」

・ DESD（持続可能な開発のための教育の 10 年）をめぐる国内外の動き
（ESD-J 運営委員長 阿部 治）

・ ESD 地域ミーティングからの報告（進行：ESD-J 辻英之・新海洋子）

沖 縄：沖縄 NGO 活動推進協議会 / 玉城直美

広 島：ESD-J 広島準備会 / 近田美智子

愛 媛：えひめグローバルネットワーク / 斉藤慎吾

大 阪：大阪 YMCA / 浜本裕子

岐 阜：NPO 法人 地球の未来 / 箕浦健二

富 山：NPO 法人 エコテクノロジー研究会 / 伊藤通子

新 潟：ESD-J「地域ネットワークミーティング」にいがた / 窪田明則

北海道：NPO 法人当別エコロジカル・コミュニティ / 菊田融

14:40 【第二部】DESD で NGO が目指すものは？ネットワーク組織の役割は？

・ 基調提案 ESD-J のミッションと中長期計画（ESD-J 新田和宏）

・ 分科会 組織体制 / 政策提言 / 情報提供 / 地域ネットワーク / 国際ネットワーク

16:50 各分科会から報告（進行：ESD-J 降旗信一）

17:20 海外ゲストより応援メッセージ

（Florida Gulf Coast 大学教授・北米環境教育学会元会長 Peter Blaze Corcoran）

17:30 終了

18:00 懇親会

■目的

「国連・持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD）」の開始を目前に控え、国内外で様々な切り口から持続可能な社会を目指す教育活動に取り組む実践者が一堂に会し、

- ① DESD」に関する国内外の最新の動きを理解し、
- ② 「DESD」への取り組みを地域でスタートさせた人たちの生の声を聞き、
- ③ 持続可能な開発のための教育（ESD）を地域で実践していくために何が必要かを議論し、
- ④ ESD-J に期待することを話し合う

ための場として、ESD 全国ミーティングを開催した。

■ 内容紹介

【第一部】動き始めた「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」

● DESD（持続可能な開発のための教育の10年）をめぐる国内外の動き

ESD-J 運営委員長の阿部氏より、2002年のヨハネスブルグサミットで「DESD」の実施が日本政府による提案を受け採択され、その後、この提案を後押しした NGO ネットワーク団体であるヨハネスブルグサミット提言フォーラムの呼びかけで2003年6月にESD-Jが発足、活動が展開されてきた経緯について説明。様々な分野で既に実施されているESD関連活動の連携や、各地域の多様な資源や社会のあり方を生かしたESD推進の重要性が強調された。



● ESD 地域ミーティングからの報告

2003年3月から2004年2月にかけて全国15ヶ所で開催されてきたESD地域ミーティングの中から8つについて、各地域の報告者より発表。各人5分ずつと短い時間ながら、南は沖縄、北は北海道まで、それぞれ豊かな地域色あふれる報告となった。報告者は、各地域の「現状」、「課題」、そして「ESD-Jに期待すること」について一言ずつ3色の紙に書き、それを聞く参加者は、同じく3色の付箋紙にそれぞれ感想や意見を一言ずつメモした。報告が済んだ後で、この紙と付箋を地域ごとに模造紙に貼り付け、各人のESDに対する取り組みや思いを繋げた。



【地域のひと言 & 参加者からのひと言抜粋】

地域	現状	課題	ESD-J への期待	参加者のひと言
沖縄	お互いを知らない、 知ろうとしない	次回はどうする	ゆるやかに	・自分自身が他を知ろうとしていない かもしれない……。 ・「ゆるやかに」同感です！
広島	共有できるキーワー ドを見つけていく	ヒロシマ＝平和？ 「地域」として・・・	ESD-J と ESD-J「地 域」との役割分担 → 制度上の措置 etc	・「ヒロシマ＝平和」を超えることが広 島の活動の幅をもっともっと広げ、可 能性を高めると思う。 ・「平和」というキーワードでつながり たい by 沖縄
愛媛	具体的課題を絞り込 んでいるところ・ば らばら・社会資源 マップ（教材）	コア団体の掘り起 こし・資金（人材 & 時間・ヒマ）・ 教育委員会・学生 との連携	人材（というか仕 掛け人）を飛ばし てください・ESD 紹介ツール	・学生と地域を結びつけるには、まず「お エライ」先生方に、関わらねばならな い必然性を知らしめましょう。 ・資金不足はネックですね。
大阪	各教育分野間のつな がりがない ESD ってなんなん？	使う用語が違う・ 継続して活動する 場・ESD をどう使 う？	情報の共有 & 発 信・行政へのアプ ローチ	・用語を定義することと平行して、意 味を完成しきれないことを知ること も必要では。 ・私の地域ではいつも行政主導。行政 の肩書きがないと動かない人も多いの で、羨ましく思った。
岐阜	持続可能な具体的地 域デザイン、食糧、 エネルギー、進行中	根本哲学の確立！	全国大会を、次は 地方で	・「地域の独立」羨ましい！ ・「根本哲学」を理解しあい共有するに はじっくり話し合う場と時間がいっぱ い必要ですね。
富山	ESD って何？	ない！場・チャン スがない！	情報・出会い「拠 点」コーディネー ト	・ESD 等の言葉の共有、一番大変な作 業ですね。 ・情報 & 出会いを進めるスイッチの入 れ方を、ESD-J はもっと考えるべき。
新潟	様々な活動が集まり 結びつく	地 域 で ESD は 可 能？	さらに水平のつな がりをも！	・地方と地方のつながりの必要性に同 感！ ・地域での ESD 実現には旧来のネット ワークを味方につける工夫が必要。
北海道	環境教育と開発教育 の人たちの交流が生 まれた	北海道は広いので 道内での地域ミー ティングが必要！	道内で地域を活性 化するための支援 （情報提供）	・開発教育と環境教育の交流は大切。 交流が価値を生み、エネルギーを生む。 ・ESD-J による地域活性化支援につい ては、支援のカタチがポイント。

【第二部】 DESD で NGO が目指すものは？ ネットワーク組織の役割は？

● 基調提案 ESD-J のミッションと中長期計画

ESD-J 運営委員の新田和宏氏より、後に続く分科会で ESD-J の役割や実施すべきことを議論する上での基礎材料として、ESD-J のミッション（設立目的）と中長期計画案が提示された。（II - 2 参照）

● 分科会

現在ESD-Jが取り組みを進めている5つのプロジェクト(組織体制・政策提言・情報提供・地域ネットワーク・国際ネットワーク)をテーマにした分科会ごとに、ESD-Jが担うべき役割や活動について各プロジェクトの観点から意見交換を行った後、全体会に戻り、話し合った内容や成果についてそれぞれ発表した。この結果を反映しESD-J運営委員会で練り直した中長期計画を、2004年の年次総会で最終化する予定。

～ 分科会担当運営委員による報告 ～

組織体制づくりプロジェクト分科会(参加者11名)

組織体制づくりPTリーダー：新田和宏

テーマ：ぎっくばらんにESDについて意見交換を行なうとともに、「ESD 地域実施計画」の策定に向けてESD-Jに対する期待を提案する。

＜「いくつものESD」があつていい＞この分科会を通じて、改めて、ESDの底知れぬ深さとその多様さを感じた。

思考過程は、一般に拡散と収斂という2つのプロセスを、行ったり来たりする往復運動だ。ESDを巡って、いまは、思いっきり拡散して考える時期、つまりブレインストーミングの時なのだと思う。何か収まりのいいESDの定義を見つけ、それで一安心する時ではない。

それにしても今回の分科会などを通じて、持続可能な社会の創造は、環境政策や経済政策や社会政策などによってアプローチするだけではなく、持続可能な社会の創造を担う市民の育成、すなわち教育によるアプローチが大切だという暗黙の共通理解(「暗黙知」)を何かのかたちにして表現しつつ、それを共有(「形式知」)する場(「ナレッジ・マネジメント」)が大いに必要だ。「出逢い」と「交流」のもとらす成果と波及効果ははかりしれないものがある。

例えば、今回、社会教育に携わる方から、ESDを考えるために次の3つの視点を提起された。

- ①グローバリゼーションとコミュニティ
- ②住民自治
- ③文化創造

いずれも、ESDを突き詰めて考えていく際に、外してはならない重要な視点だと思う。そうした視点には、これからも「無縁」であるとポジショニングしてはいられない。積極果敢な「交流」が求められる。

それから、「持続可能な社会」というESDの基本用語ですら、その人のバックグラウンドによってかなり理解が異なる旨の指摘があつた。ESDは持続可能な社会を創るための教育的アプローチと概括できるにしても、その「持続可能な社会」が多様に理解されている。

最後に、ESD-JにESDの「旋風」を巻き起こして欲しいというメッセージがあつた。それは宮沢賢治が『風の又三郎』でイメージしたような一新する風のことだろう。その風によって、「出逢い」と「交流」が促され、百花繚乱たる「いくつものESD」の花を咲かせる恵風の期待が込められていた。

政策提言プロジェクト分科会（参加者 13 名）

政策提言 PT リーダー：池田満之

この分科会では、政策提言活動に関して主に以下の 2 点を中心に話し合った。

(1) 各地域の現場で活動している人たちの声や意見の集約・反映方法について

ESD-J は各地域で活動している人たちの声を集約し、政策提言として出していくことを大きな活動の柱としているので、今後、どのようにしてそうした人たちの声や意見を集約・反映していくのがよいのかについて話し合った。そのためには、今回の全国ミーティングのように、もっと対話の機会を多く作ること、声なき声を拾いあげていくこと、このために ESD-J に来る人だけでなく、積極的にこちらから出て行って実効あるネットワークを育て、意見を取り入れていくことが大切だというような意見があった。また、ESD や ESD-J をもっとわかりやすく説明できるようにすることが大事で、そうすれば自ずと意見があがってくるのではないかといった意見もあった。

(2) DESD 国内実施計画の ESD-J 案づくりについて

国内実施計画にはどういう視点を盛り込むべきかなど、ESD-J 案づくりに向けて話し合った。この点については、教育基本法見直しの話や、戦争と平和に関する基本的なスタンスに関する例示があり、ESD に関する根幹となるところをはっきりさせること、重要な基本的理念等を明確にすることが必要だといった意見があった。ESD は、「現場を重視し、実践から人材を育てる」というスタンスで、「現場主義」、「地域重視」の姿勢で、「地域自立の視点」を大切にしてほしいという意見が多くあった。もう少し言えば、「地域に根ざした」とか「地域が決定力を持つ」といったポイントを概念的にも実行のプロセスとしても明文化、計画すべきだという意見があった。国内実施計画では、ターゲットを絞り、子どもの参画などの具体的なキーファクターに数値目標をつけるようにした方がいいという意見や、指導者養成に最も力を入れるべきだといった意見があった。このほか、地域が出してきたものが中央でも盛り込まれるように、地域 ESD 実施計画策定プログラムとの連動や、産官学民が協働で作っていくためのラウンドテーブル設置等の意見があった。また、中身の部分だけでなく、プロセスの部分も重要だということで、内閣府を核とした官民による協議会方式で国内実施計画を検討していくようにもっていくべきだといった意見があった。

情報提供プロジェクト分科会（参加者 18 名）

情報提供 PT リーダー：小栗有子

分科会は、日本で今後 ESD を発展させるためにどのような情報が必要かについて、いろんな角度から検討することを目的に実施した。参加者の立場は、小学校・高校・大学の先生、学生、エネルギーや広告企業の方、農業関係者、NGO/NPO・社団職員、公民館活動の実績をもつ方、政治をしていた人など非常に多様であり、関心の対象も動機も実に多様であった。その多様な視点から、情報提供 PT のこれまでの議論をたたき台に情報提供の「対象」「内容」「方法」について地に足のついた議論を展開した。

○「対象」者からみえてきた「内容」「方法」の問題

ESD-J が情報提供をしていく対象には、「ESD を知っている人」と「知らない人」の双方が考えられる。このうち前者は「伝える人・与えたい人」、後者は「受ける人・欲しい人」と整理すると両者に共通す

る問題がみえてきた。まず、「伝える人」の場合、ESD は往々にして「技術用語」であり、それをどう「コミュニケーション用語」（皮膚感覚の言葉）に変えていけるのかが、直面する問題であることが明らかになった。

他方「受ける人」のうち、「子ども」を設定した場合、提供すべき「内容」も見えてきた。大人もわからない ESD は、子どもにはもっとわからない。そもそも「E」も「S」も「D」もそれぞれがわかりづらい概念であり、違う切り口が必要。つまり、「S」ではない「D」という現実を伝えることが、子どもの反応を考えた場合重視しなければならない。その上で、それらの問題の克服に向けて頑張っている取り組み・姿を示すことが必要。

皮膚感覚のある「現実」という「内容」を伝達する「方法」は、話や書くといった言葉・文字だけでなく、絵やグラフも大切。伝達は、「楽しく」が条件、が確認された。

○出会いを次につなげる

議論を通して「子ども用のページ」の必要性など ESD-J に対していろんなアイデアや要望が出てきた。そこで、このまま終わらせるのはもったいない！ということで、参加者全員が、拡大情報提供 PT メンバーとしてこの場を発展させていくことで了解した。



地域ネットワークプロジェクト分科会（参加者 15 名）

地域ネットワーク PT：辻英之、新海洋子

テーマ：今後地域で多様な活動がつながるには何が必要か？

北海道から沖縄まで全国から集まった参加者同士のワークシートによる自己紹介から始まった。実際に地域で活動をされている方、ネットワーク作りにチャレンジしている方、これから始めようとする方など、まずは参加された 15 名のメンバー同士による相互理解のための時間がたいへん熱かった。

その後、「今後地域で多様な活動がつながるには何が必要か？」というテーマでキーワードを出し合い、似通ったキーワードを出した人同士のグループを作り、テーマ内容についてさらに話し合った。

つながるために必要なことの共通認識は、まずは「知りあう」ことであり、その「場」を創ることであった。「違うテーマで開催しているミーティングに、いつも同じ人が集まってくる」という問題が出されるなど、それぞれの地域地域でまずこの段階で壁にぶつかっていることが浮き彫りになった。

さらにすでにネットワークを創っている地域からは、その「場」を維持していくための仕組みが必要だという視点も出された。具体的には、「お金」や「情報」等々をコントロールできる＝様々な要素をコーディネートする「人」が必要だということである。

今回の全国ミーティング、それに先立ち各地で開催された地域ミーティングは、まさにこの「場」に相当している。この意味では継続・発展していかなければならないと言える。さらにこの「場作り」を意識する

人を増やす仕掛けを作らなければならない。

今回の分科会に参加された方が、それぞれの地域で核となる人材となることを願いたい。

★出されたキーワード

「同じ目的」「お金」「出会う場」「コーディネーター」「IT の活用」「事務局・コーディネーター」「役割分担」「こまめさ」

国際ネットワークプロジェクト分科会（参加者 12 名）

国際ネットワーク PT リーダー：大島順子

国際ネットワーク PT は、(1) 海外からのアプローチに対する窓口機能、(2) 海外への情報発信の仕組やネットワークづくり を目的として立ち上げられたばかりである。当日は、自己紹介を通して、すでに海外の NGO や学校などと交流事業をコーディネートした経験を持つメンバーがいることもあり、ESD-J が誰を対象として、どのようなネットワークのしくみをつくるべきか、幅広い具体的なアイデアがでた。

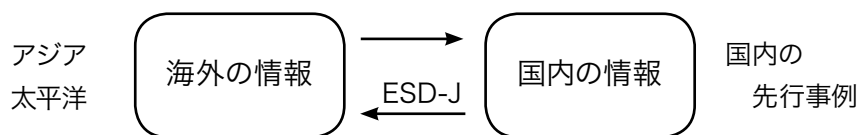
例えば、国内外ですでに展開されている ESD の事例（フォーム化）を ESD-J の HP 上で検索することができ、国境を越えて地域の活動団体が直接



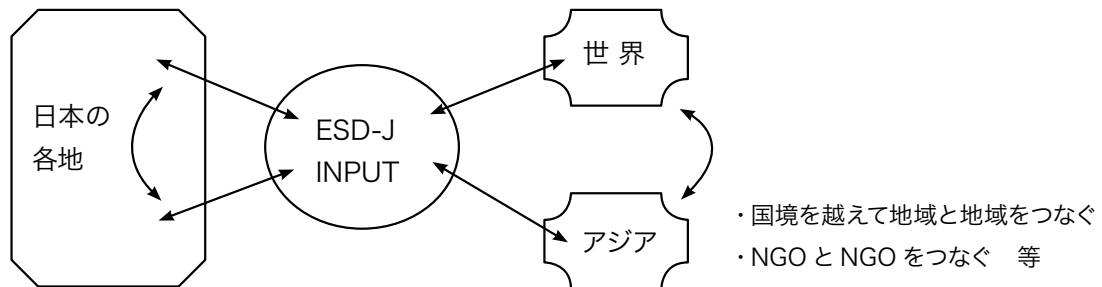
つながるきっかけとなるシステムの構築である。そして、海外の ESD および DESD に関する組織・団体などとの連携を積極的に図ること目的に、まずヨハネスブルグ・サミットで知り合った約 60 カ国の NGO に対して、ESD-J の現状を伝えることができる。また、アジア太平洋地域を中心とする ESD に関する NGO ネットワーク形成に向けて、各国の組織に呼びかけることも可能である。ESD や DESD の一つの活動として国を超えた NGO や関係国際機関と連携・協力した協働プロジェクトも可能ではないかという意見もあった。

今後も他の PT との連携（特に情報提供 PT）を取りながら、ESD-J がやるべき国際ネットワーク活動を、まずできることから始めるというスタンスで展開していこうと参加者全員で確認しあった。

【情報収集・発信のイメージ】



【つなぎ役（中間支援）のイメージ】



● 海外ゲストより応援メッセージ

Florida Gulf Coast 大学教授で地球憲章シニアアドバイザー、北米環境教育学会元会長の Peter Blaze Corcoran 氏より、ESD-J への応援メッセージ。DESD を提案した日本の ESD 推進への貢献に対する謝辞の後、ESD-J を参考に ESD-USA を設立したとの報告があった。また、今後特に日本に期待するのは ESD 教材開発とのこと。さらに、ESD を推進していく上で、「地球憲章」を倫理的枠組としてはどうか、という提案があった。

● 閉会

ESD-J 副運営委員長の池田氏より、ESD-J は「やらされる」会ではなく、「やりたい」人が集まる会でありたい、次回の全国大会は「やりたい」と手を挙げた地域で開催できれば、との言葉があり、閉会。続いて 40 余名が懇親会に参加、ミーティングでは話し足りなかったこと、話せなかったことを活発に交換しながら、さらなるネットワークを築いた。

■ 今後に向けて

わずかな時間の中ながら、様々な地域からの報告、分科会での意見交換と、日本全国から集まった参加者の熱気に満ちたミーティングとなった。今回、参加者全員に、連絡先、自己紹介、ESD に対する思いを書き込むようお願いした「ネットワークカード」は、各地域で ESD を実践している、または今後 ESD を進めていきたいと考えている参加者が繋がるツールとして、まとめて印刷の上、全員に配布する予定。

ESD-J のあり方に関していろいろな意見が出されたが、そうした意見や期待を実現するためには、個々の参加者・参加団体が主体的に関わりながら ESD-J を共につくりあげていかなければならない。まだまだ発展途上にある ESD-J が、今後単なる「東京にある中央組織」としてではなく、「全国各地の人々がつながる接点」として発展していけるかどうかは、関わる団体や個人皆に懸かっている。そして、今回の全国ミーティングは、こうした ESD-J を皆でつくりあげるプロセスを一段進展させたのではないだろうか。

報告：ESD-J 事務局 二ノ宮リムさち